

第2章では、保存活用計画の緑の保存管理の基本方針③に示されるように、熊本城のみどりの本質的価値を明らかにし管理に活かすため、江戸時代を中心にみどりに関する調査・研究の内容をまとめていく。

1. 位置¹

熊本城は、熊本市の中心部に位置し（図2-1-1）、天正16年（1588）に肥後半国の領主として入城した加藤清正が、茶臼山丘陵全体を取り込んで築城した平山城である。

茶臼山は、阿蘇溶結凝灰岩を基盤とした火山灰堆積物からなる京町台地の南端であり、東側に高みが存在し西側に向けて緩やかに下る丘陵である。かつては、台地と一体化した丘陵であったと考えられるが、現在茶臼山が独立丘陵の体をなしているのは、大正12年（1923）の道路建設のためである。

また、熊本城は周辺の自然を城防衛に活かしており、東側の千葉城町から南側の古城町を取り囲むように坪井川が、西側を囲むように井芹川が流れ、天然の水堀となっている。

¹ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018年 第3章第1節 史跡概要より転載

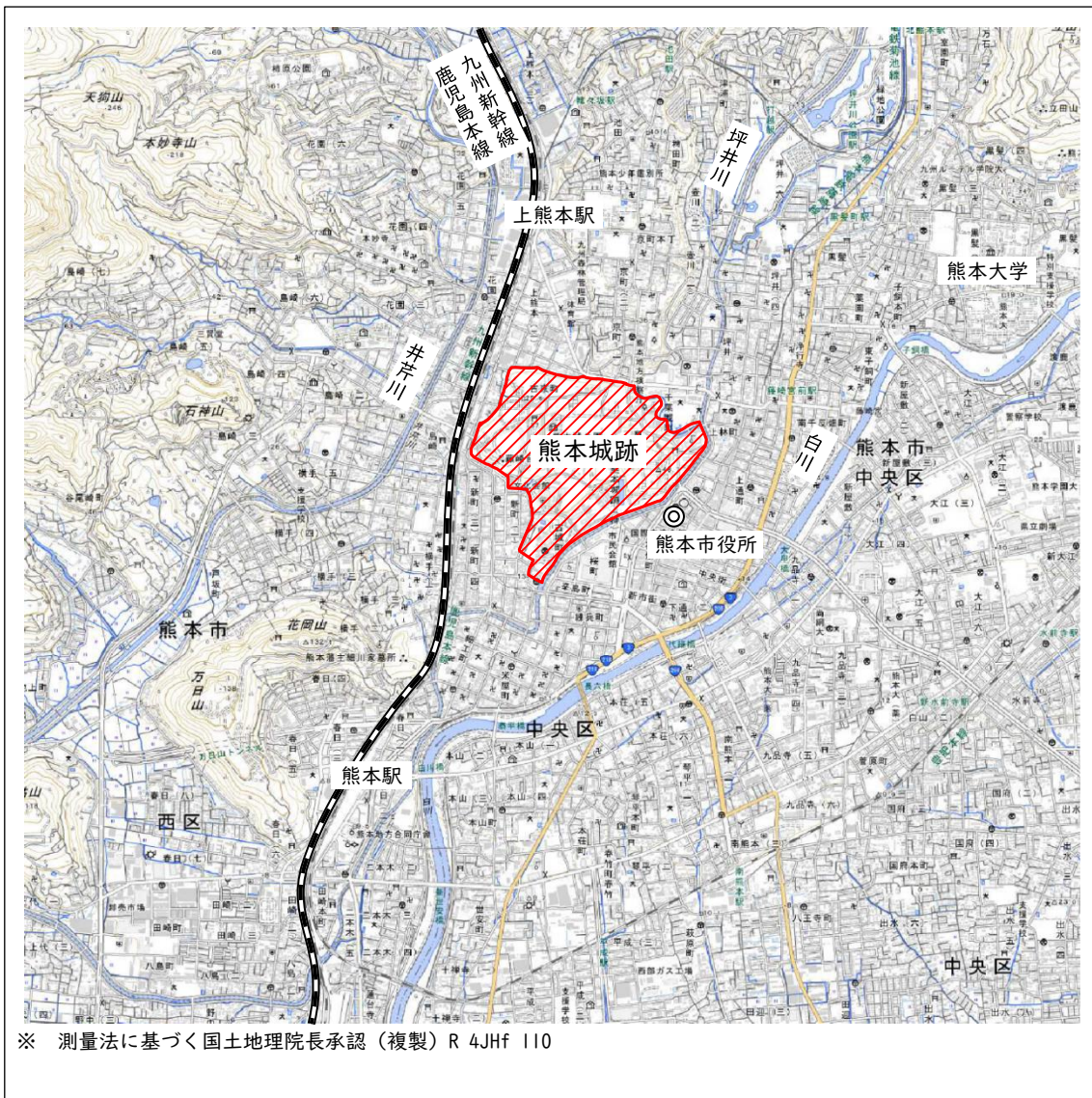


図 2-1-1 熊本城跡位置図

2. 特別史跡熊本城跡の歴史と価値

(1) 歴史²

熊本城の歴史は、文献によれば南北朝時代の藤崎台周辺に始まるとされるが、遺構は判然としていない。15 世紀後半になると、茶臼山丘陵につながる東端あたりに出田秀信が城を構えたとされる（隈本城、後に千葉城と呼ばれる）。当時この場所と西の茶臼山本体との間には玉川が流れており（現県道四方寄熊本線沿い）、北から東にかけては坪井川が台地を侵食して形成した急崖で、天然の要害となっていた。この場所は現在の千葉城町で、高台となっている旧 NHK 熊本放送局の場所が本丸であり、その西下が二の丸（現県立美術館分館）、南下が三の丸（旧日本たばこ産業（JT）熊本支店）であったといわれる。

出田氏に代わって千葉城に入ったのが鹿子木氏である。しかし、城が手狭であったことから、茶臼山の西南部に突出した丘陵末端部（現古城町）に築城して移った。ここは加藤清正が築城（新城）した後、古城と呼ばれるようになった場所である。鹿子木氏が移った後の千葉城のことは明確ではないが、江戸初期には宮本武蔵の居宅や藩の焰硝蔵等が置かれるなど武家屋敷地として幕末まで存続した。

その後、古城には鹿子木氏に代わって城親冬が入り、豊臣秀吉の九州平定後には佐々成政と代わり、そして天正 16 年（1588）に加藤清正が肥後半国（北半分）の領主となって城に入った。この頃の九州・肥後（熊本）の統治政治は、豊臣秀吉の唐入り構想の軍事態勢の一端として、本城のほかに存続させる城郭は秀吉が具体的に指示するなど秀吉の強力な意思と統率力によって推進されており、秀吉の意向を強く反映した体制が形成されていく時期であった。

現在の熊本城は、文禄元年（1592）から慶長 3 年（1598）の文禄・慶長の役から帰国した清正が、慶長 4 年（1599）に茶臼山丘陵一帯に新城の築城を開始し、慶長 12 年（1607）に完成したといわれる（この時「隈本」から「熊本」へ改称）。清正による新城築城は、豊臣政権から徳川政権への移行期に行われたものであり、秀吉逝去後の国内動乱の予兆がある中、慶長 20 年（1615）の一国一城令や武家諸法度が制定された頃までは、各大名が城の拡充など独自に整備を行っていた。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの論功行賞により肥後一国（54 万石）の大大名となった清正も、敵対する薩摩の島津氏や球磨郡の相良氏への備えを念頭に置いた整備を行ったものと思われる。

その後、寛永 9 年（1632）に加藤家が改易された後入国した細川家は、初代熊本藩主細川忠利及びその子光尚の時に熊本城の外郭部分の整備を進め、正保元年（1644）までに城郭の全体像を完成させた。以後幕末まで城の維持管理を行った。

明治維新後、明治 4 年（1871）の廃藩置県により藩主や家老等の屋敷が城外に移転

² 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018 年 第3章第4節 本質的価値より転載

することになり、広大な空地となった城内に鎮西鎮台（のちに熊本鎮台、第六師団）が設置され、ほぼ全域が軍の管理となった。このときの老朽化や戦略上の障害を理由として多くの建造物や石垣等が軍により解体、撤去されている。

明治10年（1877）の西南戦争の際に城の中枢施設であった大小天守、本丸御殿等が焼失した。さらに明治21年（1888）に熊本鎮台を母体として編成された第六師団の司令部が本丸に置かれ、また、二の丸・三の丸には多くの兵舎や倉庫群が設置された。

昭和8年（1933）に旧状を残す石垣や堀が史跡に、西南戦争等の災禍を免れて残った建造物が国宝に指定（昭和25年（1950）史跡・重要文化財に指定、その後昭和30年（1955）に特別史跡に指定）され、その高い文化財的価値・歴史的価値が示された。また、昭和25年（1950）以降には熊本市による公園整備が進められるとともに、大小天守等の建造物の再建や復元、保存修理等が行われ、現在では熊本市・熊本県のシンボルとして広く市民・県民に親しまれている。

【特別史跡（とくべつしせき）とは】³

文化財保護法における遺跡の中で、国が定めた「史跡」のうち、学術上の価値が特に高く日本の文化を象徴するもの。文化財保護法に基づき文部科学大臣が指定。

（2）城郭構造としての特色⁴

城の構造は各郭と本丸と西出丸を区分する空堀・西出丸と二の丸を区分する空堀、また、内堀に見立てた坪井川・外堀に見立てた井芹川・白川で構成されており、茶臼山の浸食谷など自然地形も取り込んだ縄張りの優秀性は高く、典型的な近世城郭であるとともに、その到達点として高い歴史的価値を持つ。

築城当初からの石垣・堀・城道で区画された土地の形状がほぼそのまま残っており、天守台を最上位として平左衛門丸・数寄屋丸・東竹の丸・飯田丸・竹の丸・西出丸と階層的な構造も往時のまま残る。また、不開門・東櫓門・須戸口門・山崎口門・西櫓門・頬当御門等本丸を囲む枳形、さらに数寄屋丸櫓門・耕作櫓門・闇り御門・四辻門で構成される本丸の中枢部まで続く枳形、北大手門・西大手門・南大手門で構成される西出丸の枳形、新堀櫓門・埋門・二の丸御門・一丁目門で構成される二の丸の枳形がそれを構成する門等の石垣とともに良く旧状を留めている。また、三丁目門・高麗門で構成される惣構の枳形など連続する枳形も絵図や古写真で確認することができる。

³ 熊本市『熊本城復旧基本計画』2018年 資料編 用語集より転載

⁴ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018年 第3章第4節 本質的価値より転載

(3) 石垣⁵

慶長9年(1604)以降、加藤家は徳川家の城郭普請の「御手伝い普請」(天下普請)を数多く手がけている。特に慶長15年(1610)の名古屋城大天守台、元和8年(1622)の江戸城大天守台、寛永元年(1624)の大坂城大天守台というように、天守台建造の役回りが顕著で、加藤家の石垣技術が高く評価され、信頼されていたことがうかがい知れる。このことは、荻生徂徠の『鈴録(けんろく)』⁶や松浦清の随筆集『甲子夜話(かっしやわ)』⁷にいわゆる清正流の石垣の特徴・威容が描かれており、江戸時代から名を馳せていたことからわかる。

また、築城当初の石垣から良好に残っており、天正末期に古城に築かれた「野面積み」に始まり、文禄・慶長の頃に加藤清正が構築した大小天守周辺の「打込はぎ」、細川忠利の入府以後の「切込はぎ」など多様な石垣構築技術の変遷を知る上でも貴重である。

現在の熊本城域の石垣の位置を図2-2-1～図2-2-4に示す。

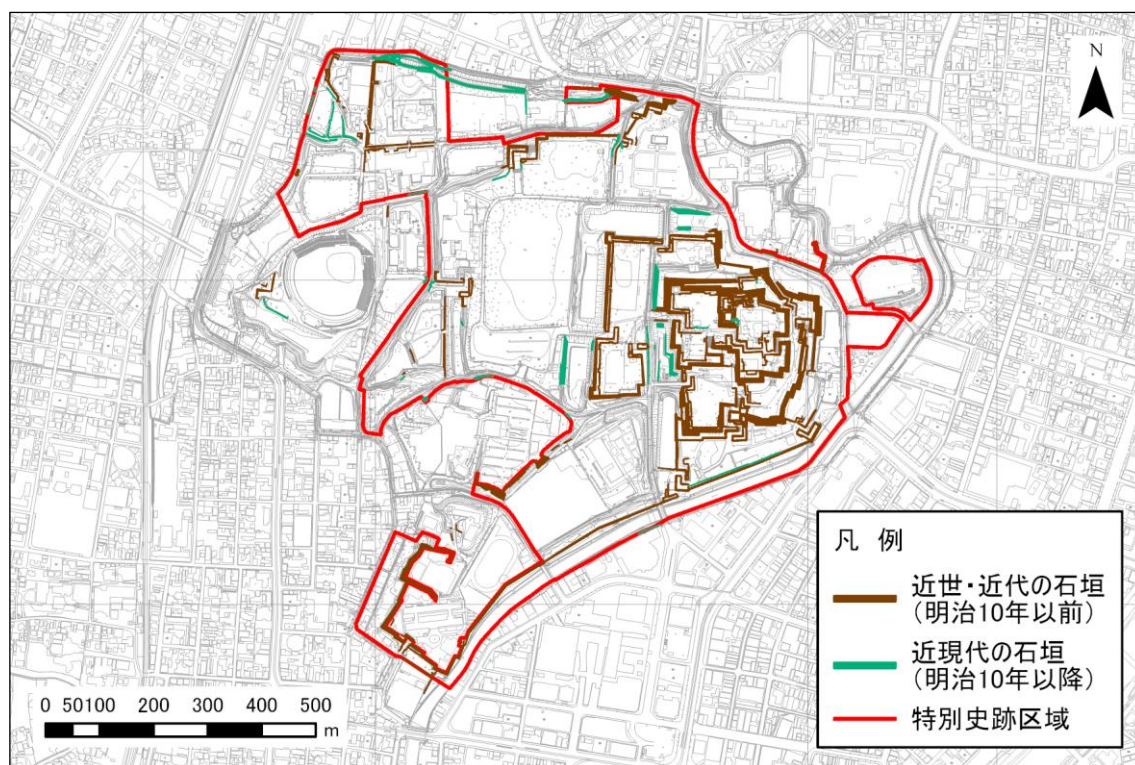


図2-2-1 石垣配置図(全体図) ※保存活用計画の図を基に修正を加えた図

⁵ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018年 第3章第4節 本質的価値より転載

⁶ 荻生徂徠『鈴録(けんろく)』(享保12年(1727))

「石垣ハ加藤清正ノ一流アリ、彼ノ家ノ士ニ飯田覚兵衛、三宅角左衛門ヲ両カクトシテ石垣ノ名人ト云イシモノナリ。石垣ヲ築クニハ、幕ヲ張テ、一円ニ外人ニ見セズト云。今ハ町人ノワザトナリ、武士ハ皆其術ヲ不知。清正ノ築ケルハ大坂・尾州・肥後の熊本ナリ」と記されている。

⁷ 松浦清(肥前国平戸藩第9代藩主、号・静山)『甲子夜話』(19世紀前半)

「加藤清正ハ石垣ノ上手ニテ、隈本城ノ石垣ヲ見タルニ、高ケレ共コパイナダラカニシテ、ノボルヘク見ユルママ、石垣ノウエ頭上ニ覆ガヘリテ空見エズ」と記されている。

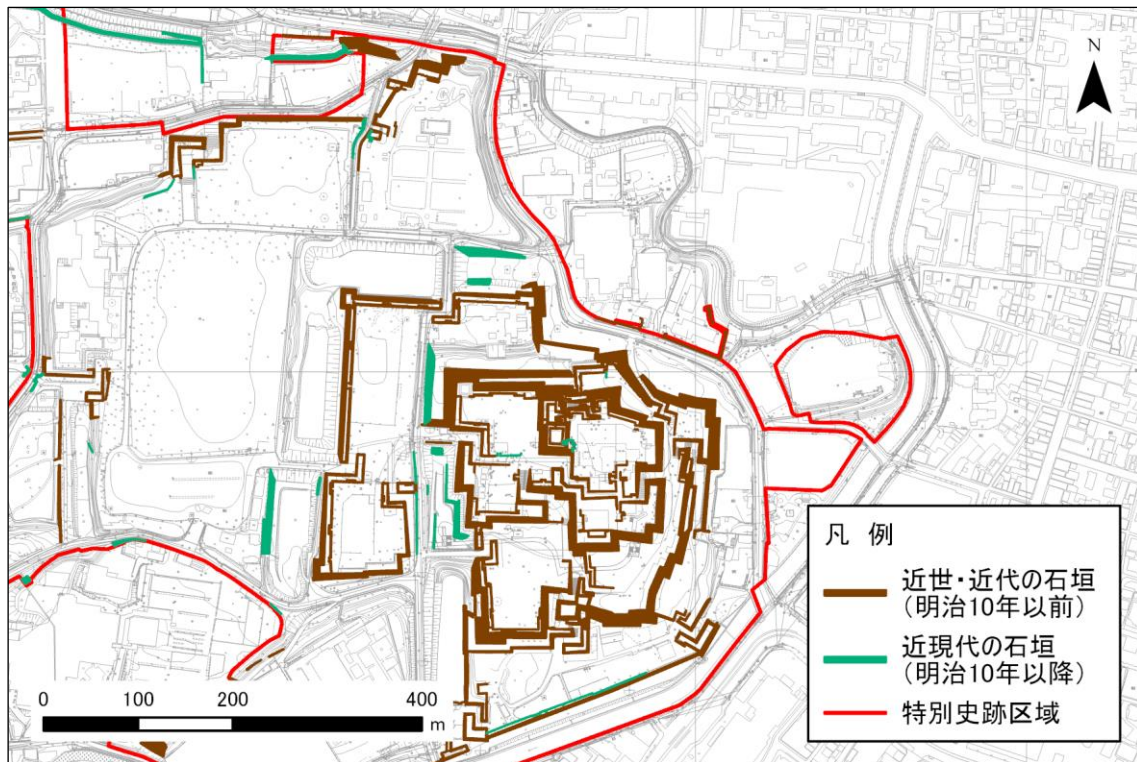


図 2-2-2 石垣配置図（本丸・二の丸・千葉城）

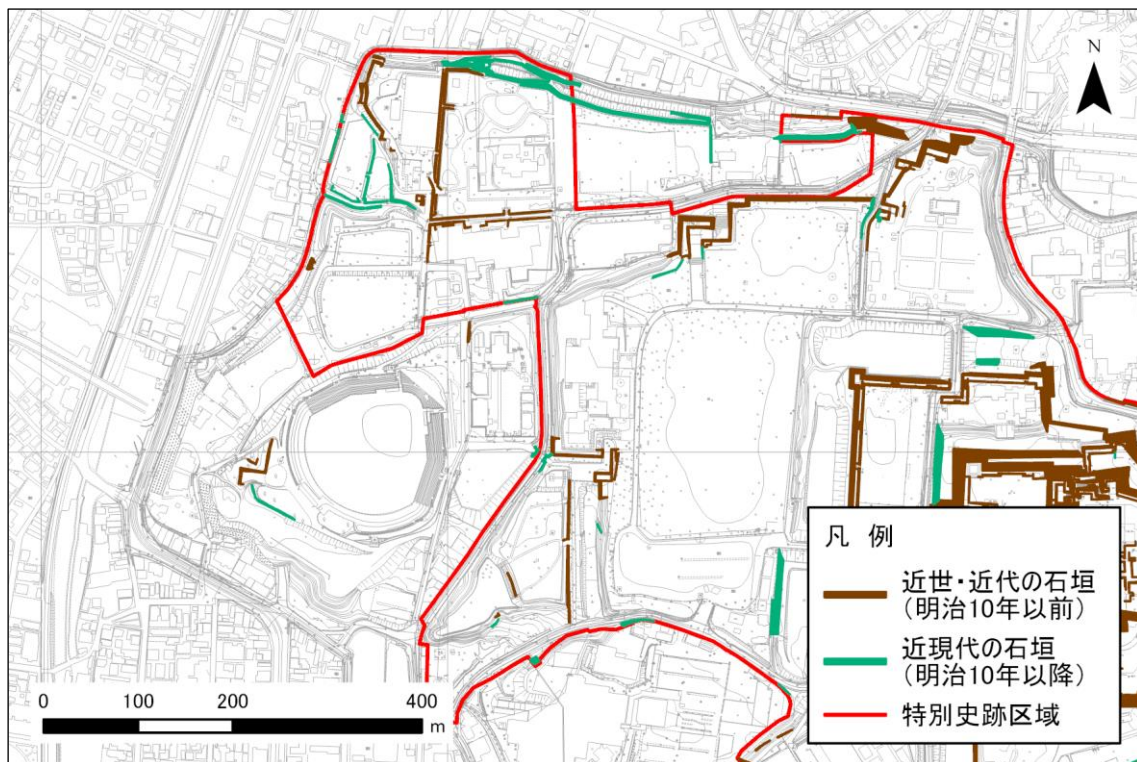


図 2-2-3 石垣配置図（三の丸・二の丸西側）

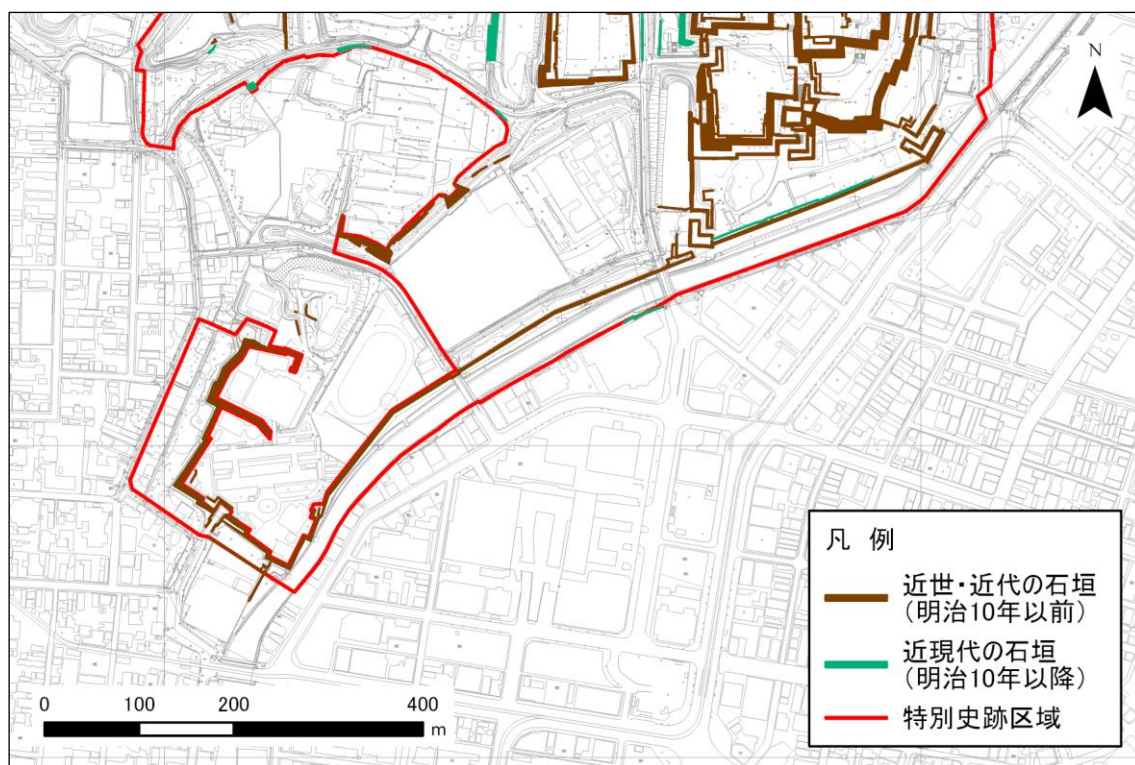


図 2-2-4 石垣配置図（本丸南側・古城）

(4) 建造物ほか

①国指定重要文化財建造物⁸

慶長から寛永期にかけて創建された建造物は、正保元年（1644）に幕府が諸藩に城絵図の提出を命じて以降、原則固定化されることになり、幕末や明治初期に描かれた絵図等からは、大小天守等の櫓 49、櫓門 18、城門 29 が存在したことが確認できる。これらの建造物は、地震や風水害のたびに修復が行われ幕末まで存続した。現存している不開門等の建造物も幕末に再建されていることが棟札によって確認できる。しかし、廃藩置県後の鎮西鎮台の設置により熊本城のほぼ全域が軍の管理下に置かれたことから大半の建造物が解体され、また、明治 10 年（1877）の西南戦争時には大小天守等本丸中枢の多くの建造物が焼失した。

昭和元年（1926）に熊本城址保存会が発足し保存運動の成果として昭和 2 年（1927）に宇土櫓の解体修理が行われた。この宇土櫓を含む東十八間櫓・不開門・長堀等 13 棟の建造物全てが昭和 8 年（1933）に国宝に指定（昭和 25 年（1950）に国の重要文化財に指定）され、現在まで保存修理等の措置が講じられてきた。特に宇土櫓は、三重五階地下一階の櫓で熊本城では大小天守を除いて最大の櫓である。近世初期に建造された現存天守と比較しても最古級に属する貴重な建築遺構と評価される建造物であるとともに、姫路城・松本城・松江城・伊予松山城に次いで 5 番目の高さ（約 19m）があり、破風やむくりは他の櫓と同様であるが、最上階に外廻縁を持ち、大小天守とともに熊本城のシンボルとなっている。

②県指定重要文化財建造物⁹

「旧細川刑部邸」

旧細川刑部邸は細川忠利の弟興孝が興した細川刑部家の下屋敷で、上級武士の下屋敷の様子をよく残していることから、昭和 60 年（1985）に県の重要文化財に指定された。平成 5 年（1993）に中央区東子飼町から三の丸地区の二丸御屋形跡に移築復原している。なお、当該地は平成 17 年（2005）に特別史跡に追加指定されている。

③未指定建造物¹⁰

「櫓方門」

櫓方会所跡（現加藤神社）にあったものを昭和 37 年（1962）に現在地に移築した歴史的建造物。その建設年代は 18 世紀後半以降と考えられている。

⁸ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018 年 第 3 章第 4 節 本質的価値より転載

⁹ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018 年 第 4 章第 5 節 建造物の保存管理に加筆

¹⁰ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018 年 第 4 章第 2 節 (I) 本丸地区を基に、熊本市『特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編』2016 年・『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編』2019 年を加えて執筆

「西櫓門」

構造形式は脇戸付高麗門棧瓦葺の城門。昭和 30 年度に解体修理が実施され、平成 9 年度に策定された熊本城復元整備計画による整備工事の一環で解体の上、特別史跡内に部材として保管されていたところで、平成 28 年（2016）熊本地震に至る。西櫓門は、江戸時代に描かれた「御城内御絵図」などによれば櫓門であり、古写真から明治 9 年（1876）頃に周囲の百間櫓の解体に伴い、規模を縮小して陸軍施設の門となった歴史的建造物。

国指定重要文化財建造物、県指定重要文化財建造物、未指定建造物の位置を図 2-2-5 に示す。

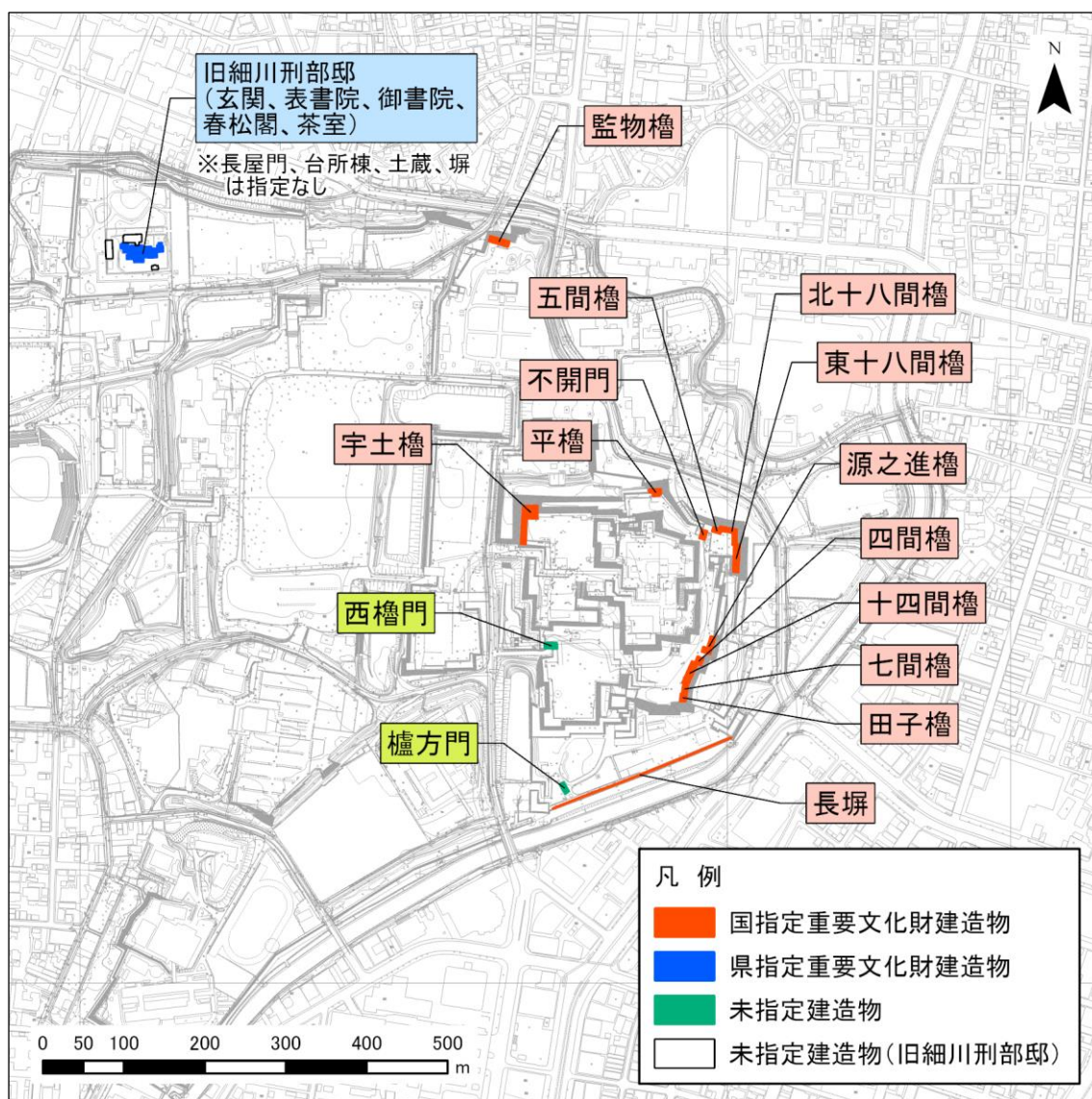


図 2-2-5 重要文化財建造物等位置図

④再建・復元建造物¹¹

熊本市・県民のシンボルである熊本城では、往時の雄姿を甦らせる機運が高まり、加藤清正生誕 350 年を記念して昭和 35 年（1960）に大小天守等が再建されるなど熊本城に関わる事象を記念して、いくつかの建造物が復元されている。また、平成 9 年度に策定した「熊本城復元整備計画」の短期整備として、築城 400 年に当たる平成 19 年（2007）までに西出丸、飯田丸一帯の建造物等及び本丸御殿大広間棟ほかの歴史的建造物の復元整備を実施した。

再建・復元建造物の位置を図 2-2-6 に示す。その一覧を表 2-2-1 に示す。

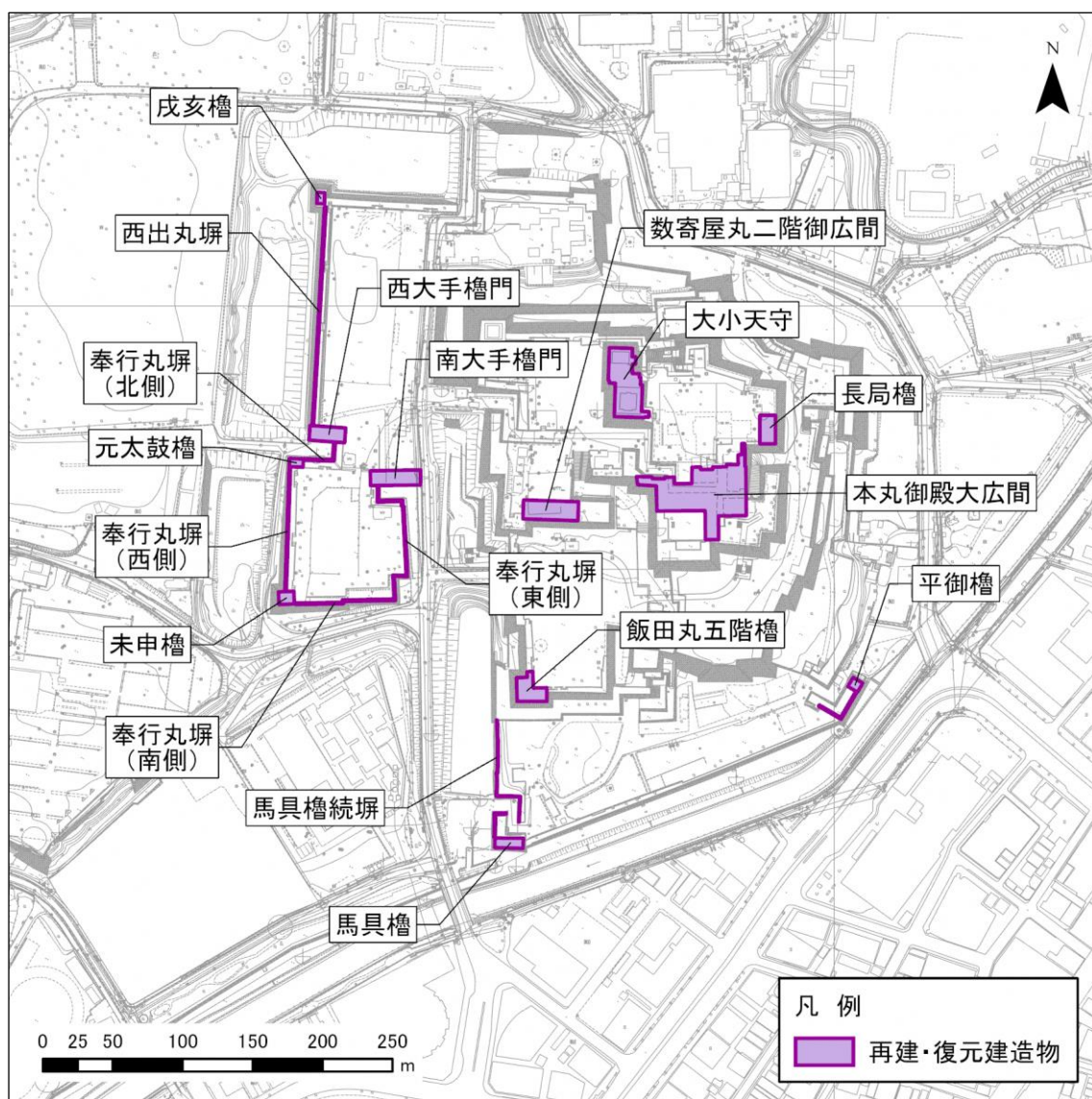


図 2-2-6 再建・復元建造物位置図

¹¹ 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018 年 第 4 章第 5 節 建造物の保存管理より転載

表 2-2-1 再建・復元建造物一覧

名 称	建築年度
大小天守	昭和35 年 (1960)
平御櫓	昭和36 年 (1961)
数寄屋丸二階御広間	平成元年 (1989)
西大手櫓門	平成15 年 (2003)
南大手櫓門	平成14 年 (2002)
戌亥櫓	平成15 年 (2003)
未申櫓	平成15 年 (2003)
元太鼓櫓	平成15 年 (2003)
西出丸塀	平成15 年 (2003)
奉行丸塀	平成15 年 (2003)
飯田丸五階櫓	平成17 年 (2005)
本丸御殿大広間ほか	平成19 年 (2007)
馬具櫓及び続塀	平成26 年 (2014)

※大小天守以外は災害復旧中もしくは災害復旧検討中

⑤国指定天然記念物「藤崎台のクスノキ群」¹²

現状では特別史跡外であるが、三の丸エリアの宮内に藤崎八幡宮跡の社叢として7本のクスの大木が残されており、推定樹齢700～1000年とみられ、大正13年（1924）に国の天然記念物「藤崎台のクスノキ群」として指定されている。位置を図2-2-7、2-2-8に示す。

なお、この天然記念物は県管理地であり本計画の対象区域外であるが、熊本城域にあり、みどりの観点から重要な要素であるため、ここに記載するものである。

詳しくは、p.145の資料（国指定天然記念物「藤崎台のクスノキ群」）にも記載している。

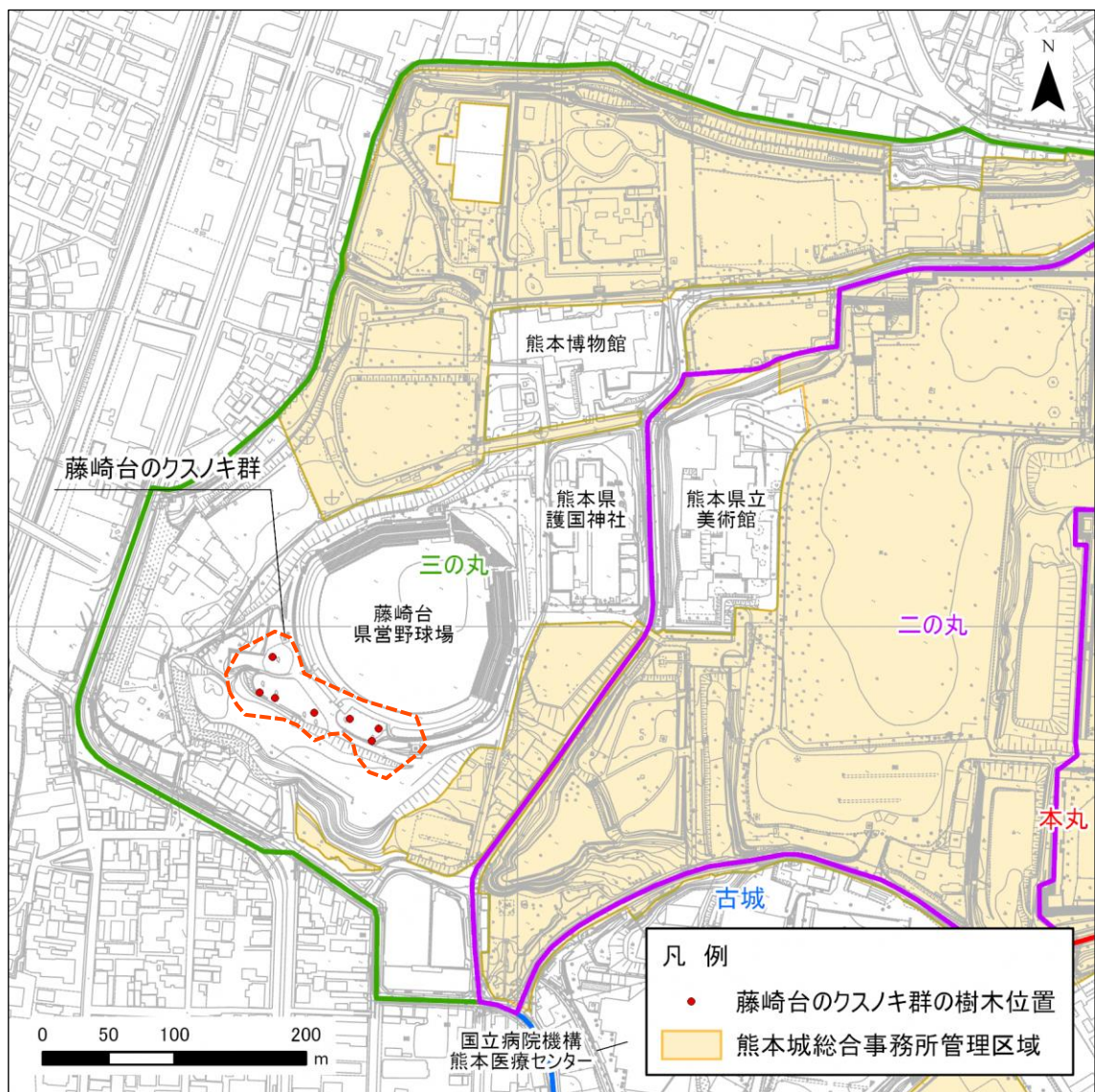


図2-2-7 国指定天然記念物「藤崎台のクスノキ群」位置図

¹² 熊本市『特別史跡熊本城跡保存活用計画』2018年 第4章第2節（3）三の丸地区より一部改変



図 2-2-8 国指定天然記念物“藤崎台のクスノキ群”

3. 土地利用の変遷

表 2-3-1 は特別史跡熊本城跡と旧城域の土地利用の変遷をまとめたものである。図 2-3-1 は表 2-3-1 の地名・名称の位置を示したものである。

以下、地区ごとの土地利用の特徴について述べる。

(1) 本丸地区

茶臼山の最も高い地形に位置する本丸地区は、中世以前の様相は明らかでない。加藤清正の築城以降、石垣・天守・櫓等が築かれ城郭の主要部として機能した。加藤時代は藩主の居所として本丸御殿が使用されたが、細川家入国後は花畑屋敷に移った。竹の丸に「作事所」、西出丸一帯に「西御蔵」（米蔵）、奉行所、櫓方会所などの藩施設が集中している。近代では、明治 4 年（1871）に平左衛門丸に錦山神社（のちの加藤神社）を造営し、数寄屋丸や頼当御門周辺には門前町が形成されたが、明治 7 年（1874）に神社が京町台に遷されると、本丸全域が陸軍用地となる。陸軍管理のもと櫓の解体・撤去等が行われたほか、明治 10 年（1877）の西南戦争開戦直前の火災で天守・本丸御殿ともに焼失した。「銀杏城」の由来ともいえる天守前のイチョウはこの時焼失したが、焼け跡から脇芽が育ち、現在も親しまれている。その後、天守前には第六師団司令部が建築され、第二次世界大戦後には熊本博物館として利用された。昭和 35 年（1960）の天守再建に伴い旧師団司令部は解体され、平成 9 年度の「熊本城復元整備計画」に基づき本丸地区では復元整備が進められ、現在に至る。

(2) 二の丸地区

本丸から空堀を隔てて西に位置し、江戸時代以降は大部分が藩主一門や家老などの上級家臣の屋敷地として利用された。宝暦 4 年（1754）12 月には二の丸の一画に藩校・時習館が設立され、明治 3 年（1870）7 月に廃止されるまで存続した。その後、時習館をはじめ二の丸にあった武家屋敷の大部分が解体され、明治 8 年（1875）には歩兵営が落成し、歩兵第十三連隊が屯営した。同連隊は大正 14 年（1925）に渡鹿へ移転し、兵舎は熊本陸軍教導学校の校舎として利用された。第二次世界大戦後、旧兵舎は熊本大学医学部や熊本県立第二高等学校の校舎として使用された。昭和 42 年（1967）に二の丸を中心とした約 42ha の公園整備事業が認可され、整備が進められたことで、現在も市民の憩いの広場として親しまれている。二の丸広場の北西には昭和 51 年（1976）に熊本県立美術館が開館した。

(3) 三の丸地区

二の丸地区北部の一段下がった曲輪から藤崎台にかけての一帯であり、承平 5 年（935）に藤崎八幡宮が造営された。14 世紀には北朝方の城として「藤崎城」の名が史料に見えるが、具体的な場所は明らかではない。文明年間（1466～1470）の「菊池重朝書状」には「宮内荘」の記述が見え、藤崎八幡宮が経営する荘園がこの一帯に形成されていたと考えられる。江戸時代以降は武家屋敷と藤崎八幡宮・宮寺及び社人の屋敷地となって

いた。文政 7 年（1824）には藩主斉茲の住居として「二丸御屋形」（二丸御住居）が現在の旧細川刑部邸の位置につくられた。天保 14 年（1843）に増改築、文久元年（1861）に増改築と庭園の造成が行われた。また、文久元年（1861）には「宮内御屋形」が現在の護国神社の位置につくられるなど、江戸時代後期には藩主や藩主家族の住居が整備された。明治 7 年（1874）に熊本城一帯が陸軍用地に編入されると、二丸御屋形跡は野砲兵営地となった。明治 10 年（1877）の西南戦争では段山一帯で激しい戦いが繰り広げられ、藤崎八幡宮は兵火で焼失し、翌年に井川淵町に移転した。野砲兵営地は明治 19 年（1886）に輜重兵第六大隊の営地となり、明治 42 年（1909）～大正元年（1912）の間に拡張され、第二次世界大戦まで存続した。大正 13 年（1924）には 7 本のクスノキが「藤崎台のクスノキ群」として国の天然記念物に指定された。昭和 21 年（1946）には旧輜重兵営を一部利用して化学及血清療法研究所が設置され、昭和 51 年（1976）に一部移転、昭和 53 年（1978）には熊本博物館が開館した。平成 5 年（1993）は旧細川刑部邸が移築復原され、外庭に「二丸御屋形」をイメージした庭園を再現整備した。

（4） 古城地区

茶臼山台地南西側に延びる丘陵部と、その東側の一段下った場所であり、現在は熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院）、桜の馬場城彩苑、桜の馬場バス駐車場などが所在する。現在の第一高校一帯は、グラウンドに面する崖面に古墳時代に構築された古城横穴群があり¹³、古墳時代からこの一帯が利用されていたことが知られる。第一高校や国立病院一帯は中世の隈本城が築かれた場所で、国立病院で行われた発掘調査では 13 世紀から 16 世紀の土器・陶磁器の出土や、16 世紀代の堀・柵・櫓・掘立柱建物群などが確認されている¹⁴。天正 16 年（1588）に加藤清正が肥後北半国領主として入城すると、天正 18 年（1590）頃から石垣・堀をはじめとする普請が行われた。清正時代の隈本城は「本丸」・「小座敷丸」・「あまくさ丸」・「西之丸」などの曲輪からなり、天守・小天守・櫓・櫓門・蔵などの建築物があった¹⁵。その後、新城（熊本城）が築城され本丸が移ると古城地区一帯は上級家臣の武家屋敷として利用され、細川時代にも引き継がれた。国立病院敷地には家老の松井家の下屋敷があり、庭に面した 2 階建ての「一日亭」が知られている。桜馬場一帯は本来、蛇行した白川の河道であったが、築城の過程で河川改修が行われ城域に取り込まれ、江戸時代を通じて武家屋敷として利用された。現在の桜の馬場城彩苑の一帯は江戸時代中頃以降、御用屋敷・掃除方用屋敷として使われた。明治 3 年（1870）に現在の第一高校には古城医学校が開校し、同 4 年（1871）には熊本洋学校が開校した。両学校の外国人教師マンスフェルトとジェーンズの官舎が敷地東側に建築された。明治 8 年（1875）には古城医学校、翌 9 年（1876）に熊本洋学校が廃校となり、跡地は明治 20 年（1887）に南千反畑に移転するまで熊本県庁が利用する。そ

¹³ 熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971 年

¹⁴ 熊本県教育委員会『熊本城遺跡群古城上段』2012 年

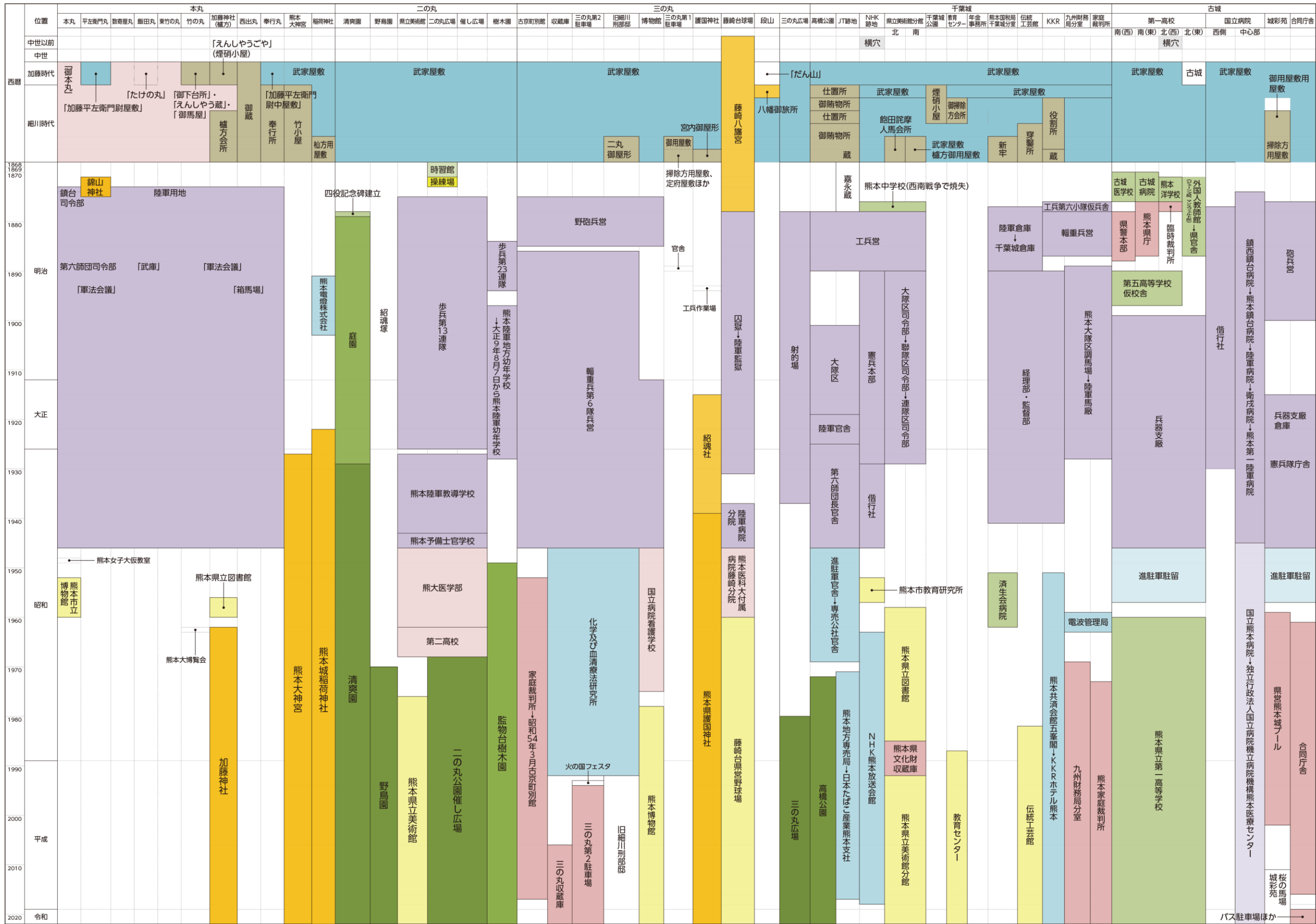
¹⁵ 下高大輔・木下泰葉「加藤清正の隈本城（古城）の復元的研究」『熊本城調査研究センター年報 7』2021 年

の後、第五高等学校の仮校舎として利用されたが明治 32 年（1899）からは兵器支廠として利用された。国立病院には明治 7 年（1874）に陸軍病院が建築され、西側には明治 10 年（1877）に偕行社が、桜馬場は明治 8 年（1875）に砲兵営が設置されるなど、陸軍用地として利用された。砲兵営が明治 32 年（1899）に移転すると、大正時代初期には兵器支廠倉庫として利用された。桜馬場地区の発掘調査では当時の倉庫のレンガ基礎などが確認されている。第二次世界大戦後、古城地区のうち国立病院を除いて進駐軍に接收されるが、解除後は第一高校、合同庁舎、県営熊本城プールとして利用され、平成 23 年（2011）には県営プール跡地に桜の馬場城彩苑が完成、平成 27 年（2015）には合同庁舎が移転して現在に至る。

（5） 千葉城地区

磐根橋から厩橋に通じる県道四方寄熊本線と旧坪井川河道・現坪井川に挟まれた地区で、現在は熊本家庭裁判所、KKR ホテル熊本、熊本県伝統工芸館、旧熊本国税局千葉城分室、熊本県立美術館分館がある。地区の最も東にある坪井川に面した高台では、昭和 37 年（1962）の NHK 熊本放送会館建築の際に 10 基の横穴墓が確認されている。15 世紀には出田氏が在城した隈本城（千葉城）があったと江戸時代中期に成立した『肥後国誌』に記載がある。加藤清正の熊本城築城にあたり城域に取り込まれ、一帯は武家屋敷として利用された。細川時代以降も大部分が武家屋敷であり、JT 跡地には仕置所・賄物所、千葉城公園付近には煙硝小屋などの藩施設があったが時期により変遷がある。NHK 跡地は「高屋敷」と呼ばれ、明治 9 年（1876）には熊本中学校となるが翌年の西南戦争で焼失した。明治 10 年（1877）以降は地区の多くが陸軍用地として利用されており、工兵営や輜重兵営ののち、大隊区司令部や憲兵本部、官舎などに利用された。昭和 4 年（1929）には NHK 跡地の位置に偕行社が古城地区から移転新築完成した。昭和 12 年（1937）に坪井川は現在の流路に変更されている。戦後は熊本地方専売局（のち日本たばこ産業熊本支社）、NHK 熊本放送会館、熊本県立図書館などが建設され、県立図書館跡は平成 4 年（1992）に熊本県立美術館分館となる。昭和 57 年（1982）に熊本県伝統工芸館が開館した。平成 27 年（2015）に日本たばこ産業熊本支社、平成 29 年（2017）に NHK 熊本放送会館が移転し、両地は令和元年（2019）に特別史跡熊本城跡の追加指定を受け、現在に至る。

表 2-3-1 土地利用の変遷（場所毎年表）



「」は絵図・地図に記載の名称をそのまま記載した。表の空白部分は不明で、施設の廃止・未設置を示すものではない。
【主要参考資料】上米良利晴編『熊本県神社誌』青潮社 1981、新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史 別編 第一巻 絵図・地図 上 近世』、『同 下 近代・現代』熊本市 1993、『新熊本市史 通史編』第一巻～第九巻 1997～2003、『新熊本市史 別編 第三巻 年表』熊本市 2003、熊本市都市政策研究所『熊本市都市形成史図集』2014、同『熊本市都市形成史図集 戦後編』2016、『特別史跡熊本城跡秘話報告書 歴史資料編』熊本市 2019

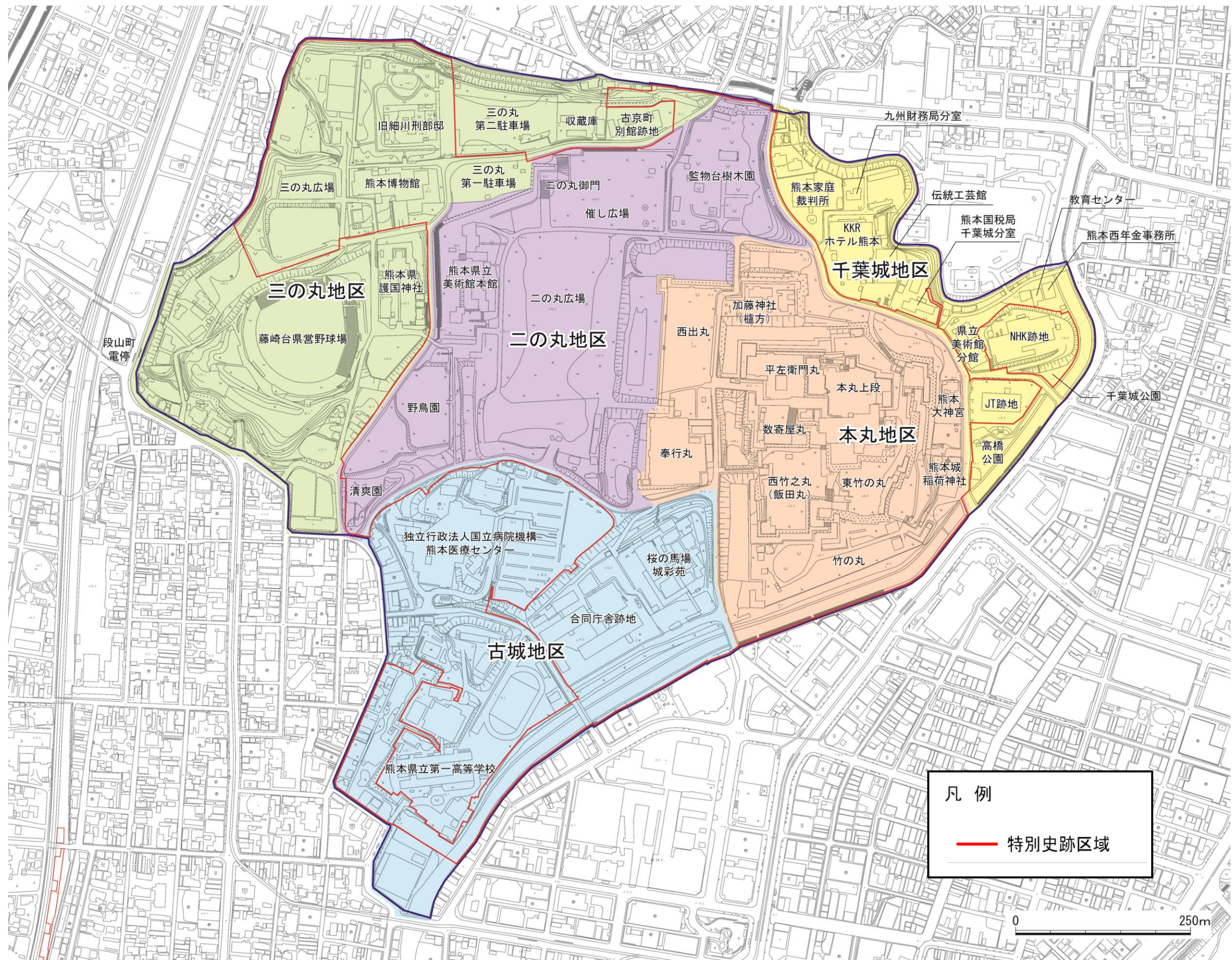


図 2-3-1 土地利用の変遷（表 2-3-1）の地名位置図

4. 近世・近代・現代の植栽

(1) 近世における城内の植栽

近世の熊本城における樹木や植樹に関する事項については表 2-4-1 に、近世の熊本城内の植物景観については、主に絵図資料によって表 2-4-2 にまとめた。図 2-4-3 は、表 2-4-2 の御城内御絵図の分割位置を示す図である。絵図では細かな樹種の特定はできなかったが、城域全体でスギ・マツ・クスノキ等の樹木が確認できた。

熊本城は「銀杏城」の別名でも親しまれているが、これは天守前にあるイチヨウの大木が加藤清正の手植えという伝承があることに由来し、江戸時代後期の儒者・頼山陽も熊本城と銀杏にまつわる漢詩を詠んでいる¹⁶。このイチヨウは万延元年（1860）の大風で幹が吹き折られ本丸御殿の御居間に倒れ破壊したと記録にある¹⁷。その後、明治 10 年（1877）の西南戦争開戦直前の火災で焼失したが、燃え跡から脇芽が育ち現在、一番太い主幹の幹周が 3.5m、総幹周 12.2m の大木に育っており、焼失したイチヨウの幹は現在も残っている。加藤清正お手植えと伝承のあるイチヨウは加藤神社境内にもあり、昭和 29 年（1954）に樹勢が衰えていたことから伐採される寸前であったが¹⁸、保存され現在に至っている。

飯田丸や竹の丸にはクスノキの古樹が現在も残っており、明和 6 年（1769）頃の「御城内御絵図」には飯田丸のクスノキや、前述した天守前のイチヨウも描かれている。特定の役割を持たせた樹木としては、竹の丸にあるスギ林があり、慶応 3 年（1867）には花畑屋敷から城内へ「覆道」と呼ばれる通路を建設するため、竹の丸のスギを材木として使用した記録が残る¹⁹。また、不開門へ向かう坂道と、坂道下の冠木門前にはスギが連続して植えられた様子が「御城内御絵図」に描かれる。樹木が密集して植えられている様子から、門の入口や坂道が頻繁に利用するような場所ではなかったと考えられ、さらに樹木で入口の存在を隠そうとする意図があったと考えられる²⁰。

熊本城においては幕末期の古写真は伝来していないが、明治 10 年（1877）の西南戦争以前に撮影されたものは江戸時代の景観をおおよそ保っているものと考えられるので、古写真からうかがえる植物景観に触れておく。石垣上の大部分は堀または櫓等の建物が構築されていたため、石垣上面に樹木などの植生はなく、石垣面にも樹木はほとんど見られない。城下から城内を望む写真は比較的樹木が少なく眺望が良いが、天守から城下を写した写真には多くの樹木が写り、武家屋敷の様相は判別しにくい。地区ごとの特徴を述べると、前述した竹の丸のスギ林のほか（図 2-4-1）、桜馬場一帯には竹林があったことが確認でき（図 2-4-2）、古城堀では蓮が繁茂した様子が写っている。

¹⁶ 中野嘉太郎『加藤清正伝』青潮社 1979 年

¹⁷ 上妻博之「清正公と名木（五）」『熊本城』熊本城跡保存会 1940 年

¹⁸ 昭和 29 年 3 月 10 日付「熊本日日新聞」

¹⁹ 『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編 史料・解説』熊本市 2019 年

²⁰ 内柴御風「熊本城追憶拾遺記」『熊本城』熊本城跡保存会 1942 年に「此の坂道はすべて大木の杉並木を以て覆はれていた。（中略）下部冠木門の門扉に密接して、門前に垣を為た様に、根もとから数茎に繁茂した大木の古杉三四株があって、こゝに門ありと見えぬまで、覆ひ詰めて居たのであった」と記載がある。



図 2-4-1 竹の丸のスギ林（熊本市寄託）

図 2-4-2 桜馬場の竹林
(長崎大学附属図書館蔵)

熊本城内では樹木や植物にまつわる地名がいくつかみられるので、地誌によって紹介する。明和9年（1772）に成立した『肥後国誌』²¹によると、「藤崎」は山城国から石清水八幡宮を勧請する際、勅使が持っていた藤鞭を3つに折って3か所に埋め、この地に埋めたものから枝葉が生えてきたことから藤崎の名前が付き、この藤は藤崎八幡宮に現存するとある。「漆畑」は宮内に漆の木があったことから里俗で呼ばれるようになったものである。古京町の長岡伊豆屋敷（百間石垣前）の敷地内には「天神森」と呼ばれる森があった。また、宮内槇島坂から砂薬師へ下った杉馬場の下には「一寸榎」と呼ばれるエノキがあったという。天明4年（1784）に寺本直廉によって書かれた「肥後見聞雑記」²²によると、厩橋際の「大榎木」は築城の際に縄張の縄を埋めた場所だという伝承があり、これらの樹木は近代以降に失われたとみられ、現存していない。

最後に、城内の植生に直接の関わりはないが、熊本藩の植物に関する取り組みについて述べておく。宝暦の改革を推進した細川重賢は博物学にも造詣が深く、植物に関しては「そうもくいきうつし 艸木生写」や「かばくけいじょう 花木形状」、ひやくきぼうじょう「百卉俾状」など写生帖を残している。さらに、医学校「再春館」の設立に先がけて、効能のある薬種や樹木を栽培する薬園「ばんじえん 蕃滋園」が宝暦6年（1756）に設けられた。そのうちの一つは熊本城下建部たけべに設けられ、現在は「薬園町」の地名として残っている。蕃滋園は薬草類の栽培だけでなく、藩主の博物学に関する植物を栽培する施設としても利用された。また、重賢は武士の精神修養と品性の向上のために菊の栽培を奨励したとされ、その後熊本では「肥後六花」と呼ばれる園芸文化が発展した。肥後六花は肥後椿・肥後芍薬・肥後花菖蒲・肥後朝顔・肥後菊・肥後山茶花であり、共通の特徴として花芯が見事なこと、花形が一重一文字咲であること、花色が純粋なこと、の3つがあげられる（詳細は資料：「肥後六花」p. 36～p. 39 に記載）。

²¹ 後藤是山編『肥後国誌』青潮社 1971年

²² 「肥後見聞雑記」『肥後国地誌集』青潮社 1980年

表 2-4-1 近世の熊本城における樹木や植樹に関する記述

和暦	西暦	内容	出典	備考
慶長 6 年以降 ～慶長 16 年	1604～1611 年	植木の季節なので、栗・柿・梨などの樹木を植えるようにと加藤清正の指示あり	(年不詳)2 月 8 日付加藤清正書状 (長崎氏所蔵文書)『歴史資料編』65 号文書	植樹位置は不明
明和 6 年頃	1769 年頃	本丸御殿御居間周辺: イチョウほか、平左衛門丸: スギほか、数寄屋丸: スギ、飯田丸: クス・マツ、東竹の丸: クス、スギ、マツ、竹の丸: スギ、クスほか	御城内御絵図	古樹: 天守前のイチョウ、飯田丸のクス、東竹の丸のクス、竹の丸のクス
万延元年	1860 年	天守前のイチョウ、大風で幹が吹き折られ、本丸御殿御居間に倒れ破壊する	本藩年表	上妻博之「清正公と名木」に記載あり
慶応 3 年	1867 年	藩主らの通行のため、花畑屋敷から本丸への覆道を建築するにあたり、竹の丸のスギを使用する	機密間日記(永青文庫 12.2.7) 『歴史資料編』198 文書	

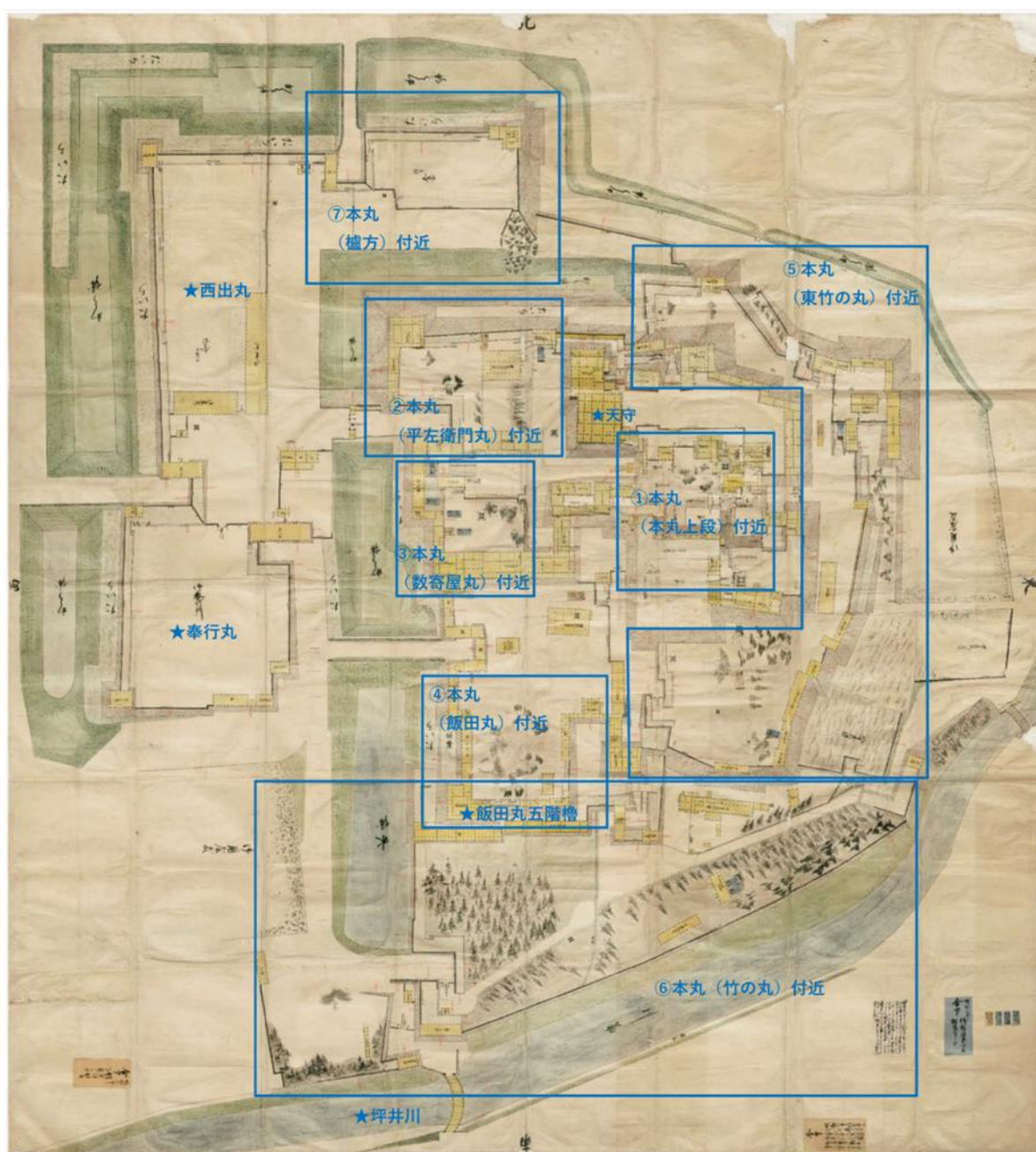


図 2-4-3 御城内御絵図 分割図

表 2-4-2 (1) 絵図から読み取れる江戸時代における城内の植物景観

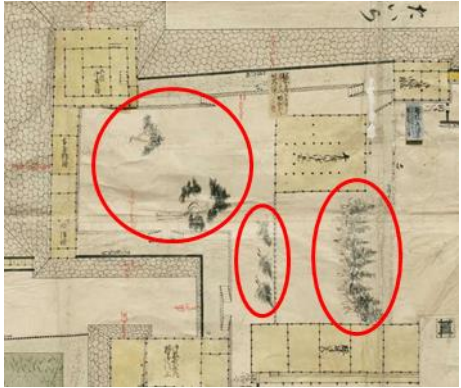
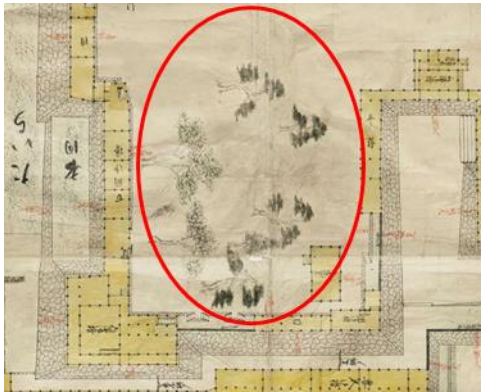
絵図	年代	所蔵	地区	内容	図
御城内御絵図 ※図2-4-3 御城内御絵図 分割図参照	明和6年(1769)頃	熊本市蔵	(本丸上段) ①本丸	・本丸御殿御居間南側の路地に4本程度の樹木あり(イチョウも含む) ・本丸御殿大広間南西に樹木あり	
			(平左衛門丸) ②本丸	・平左衛門丸台所南側にスギ並木あり ・宇土櫓側にマツ1本、広葉樹1本あり	
			(数寄屋丸) ③本丸	・井戸の東側にスギとみられる樹木群あり	
			(飯田丸) ④本丸	・百間櫓東側にクスノキ、マツ複数本あり	

表 2-4-2 (2) 絵図から読み取れる江戸時代における城内の植物景観

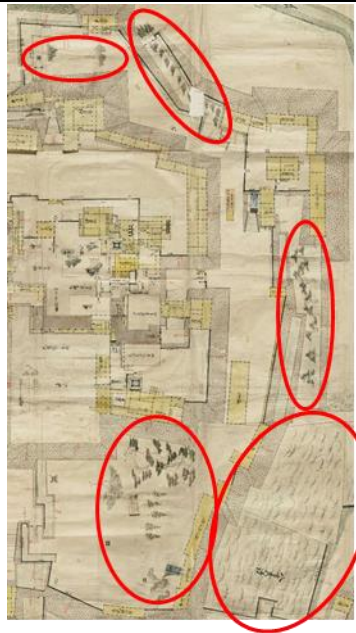
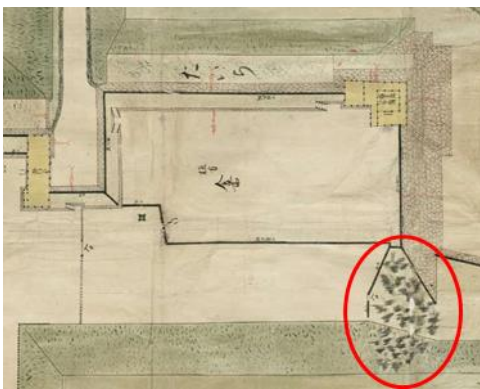
絵図	年代	所蔵	地区	内容	図
御城内御絵図	明和6年(1769)頃	熊本市蔵	(東竹の丸) ⑤本丸	・重要文化財櫓群の西側にマツ3本、広葉樹3本(クスノキか)、スギ5本あり ・平櫓前の広場に広葉樹2本あり ・不開門坂道と坂道下にスギ十数本あり ・東十八間櫓南側の平場にマツ複数本あり ・八方蔵跡(重要文化財櫓群東側下段)に笹の描写あり	
			(竹の丸) ⑥本丸	・要人櫓下・長堀内側にスギ林あり(作事所が建築資材として使用した記録あり) ・書物櫓西側にスギほか複数樹種の樹木あり。勢屯中央に広葉樹の大木がある	
			(櫓方) ⑦本丸	・櫓方会所南側から空堀にかけての斜面にマツ林あり	
御奉行所絵図	(宝暦6年(1756)以降) 江戸時代中期以降	永青文庫蔵	(奉行丸) 本丸	・奉行丸のうち、南側の機密間西に樹木あり ・未申櫓北側の石垣上に1本、櫓東側に2本のマツがある	

表 2-4-2 (3) 絵図から読み取れる江戸時代における城内の植物景観

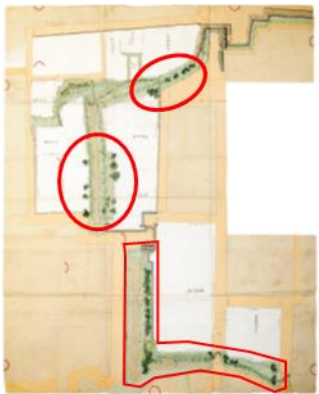
絵図	年代	所蔵	地区	内容	図
御土居御絵図	文政元～10年（1818～1827）	熊本県立図書館蔵	二の丸	・長岡山城預櫓南側の土手に広葉樹・スギ ・法華坂から二の丸広場への入口部分の土手に広葉樹 ・二の丸御門東側の石垣上にマツ10本ほどあり	
			三の丸	・監物櫓北東の土手にクスノキらしき樹木あり ・新堀の堀底付近にスギ林あり	
			三の丸	・森本櫓南側の土手に広葉樹・スギあり ・杉塘の堀沿いにスギあり	
				・藤崎八幡宮南側の土手に広葉樹（クスノキか）やスギの林あり	
			古城	・新町側の水堀の土手に広葉樹・スギあり	

表 2-4-2 (4) 絵図から読み取れる江戸時代における城内の植物景観

絵図	年代	所蔵	地区	内容	図
御土居御絵図	文政元～10年（1818～1827）	熊本県立図書館蔵	古城	・桜馬場の坪井川沿い（坂崎忠左衛門屋敷内）にマツ3本があるほかは、石垣上に樹木は見られない	
			千葉城	・土塁上に複数の広葉樹・スギあり	
熊本所分絵図 二丸之絵図	文久元年（1861）以降	永青文庫蔵	本丸	・奉行丸南側の通路南側にスギ並木あり	
熊本城之図	明治時代		本丸	・長堀通りにサクラ並木あり	

【資料：肥後六花²³】

肥後六花とは熊本特有の古典園芸植物のうち、肥後椿、肥後芍薬、肥後花菖蒲、肥後朝顔、肥後菊、肥後山茶花を指す。いずれも他にはない特徴を持つ美しい花々である。熊本藩第6代藩主細川重賢が武士たちの精神修養のために菊の栽培を奨励したことが起源とされる。第10代藩主細川斉護のころに誕生した園芸を愛好する藩士たちの集まりである「花連」によって様々な植物が栽培されたが、上記6種類の花は「肥後六花」と呼ばれ、数ある熊本の園芸植物の中でも特に重要視されている。代表的な特徴として、「花芯が大きい」「一重一文字咲き」「純粋な花色」などが挙げられる。

肥後六花にはそれぞれに保存団体が存在し、伝統を守りながら栽培が行われているが、栽培家の減少などさまざまな課題がある。以下、それぞれの花について開花時期順に記載する。

○肥後椿（2月～4月開花）



肥後椿

栽培の正確な起源は不明だが、文政12年（1829）に書かれた『江戸白金植木屋文助筆記』に肥後椿の品種と栽培方法についての記載がみられるのが現在判明している最も古い記録である。

肥後椿の特徴は花弁が一重咲きで平開するものが多いこと、雄しべが梅芯と呼ばれる形態をしていることである。梅芯とは100本～200本の花糸が梅の花のように広がっているもので、花糸が大きく花内全体に均等に広がるものほど美しいとされ、花色は紅、白、桃色などが存在する。盆栽や庭木として栽培されるが、前者は熊本独

特の栽培方法である。

第二次世界大戦によって肥後椿栽培は大打撃を受けたが、このような状況を憂いた愛好家たちによって昭和33年（1958）に「肥後つばき協会」が設立された。また、肥後椿の保存・普及活動が行われた結果、海外にも輸出されるほど人気を博するようになり、昭和49年（1974）には「市の花」に選定されている。

²³ （参考・引用文献）熊本記念植物採集会『熊本県植物誌』熊本記念植物採集会 1969年 pp62-64
 熊本日日新聞社『ふるさとシリーズ② 肥後六花』熊本日日新聞社 1986年
 上妻博之「肥後藩の園芸家と物産家(三)」『日本談義』日本談義社 1946年
 島田弥市「肥後の名花」『熊本記念植物採集会雑誌』熊本記念植物採集会 1962年
 誠文堂新光社『ガーデンライフ別冊 肥後銘花集』誠文堂新光社 1974年
 肥後銘花保存会『肥後六花撰』誠文堂新光社 1974年

○肥後芍薬（4月下旬～5月上旬）



肥後芍薬

肥後芍薬は肥後六花の中で最も早く栽培が始まったと考えられている。肥後芍薬の開祖とも呼ばれる熊本藩士・中瀬助之進が寛政7年（1795）に著した『芍薬花品評論』では肥後芍薬の栽培方法、花壇の作り方、鑑賞法などが定められている。肥後芍薬の特徴は一重咲きで花弁が離れており、黄金色の雄しべが盛り上がり雌しべを抱え込んでいることである。花色は白・桃・赤・淡紅・濃紅・紫などがある。花形が整い花弁が離れ一重であること、雄しべが多く（100～200本程度）盛り上がりが大きく花内に広がることなどが良品の条件とされる。肥後芍薬の正式な栽培方法は花壇作りとされており、花壇の寸法や配置は厳格に定められている。栽培が盛んだったころは花期に花壇上に棚を作り、上部から品種を記した金紙・銀紙を吊るして観賞したとされている。

肥後芍薬は明治時代には400品種程あったが、大正時代以降は徐々に栽培家が減少し、第二次世界大戦の影響もあって多くの品種が失われた。以前は「肥後芍薬白蝶会」が保存団体として肥後芍薬の保存・普及に努めていたが、令和4年（2022）6月時点で県内で肥後芍薬を栽培しているのは数名程度となるなど後継者不足が深刻になっている。

○肥後花菖蒲（6月上旬～中旬開花）



肥後花菖蒲

肥後花菖蒲の由来については熊本市水道町にある法念寺に建てられた『熊本花菖蒲記念碑』に記載がある。記念碑によると、天保年間（1830～1844）に松平左金吾という旗本が江戸で花菖蒲の名品を作出したことを知った藩主・細川斉護が花を譲り受けようとしたが断られたため、家臣の吉田潤之助を松平のもとに弟子入りさせ、数年間の修行を経てようやく苗を分けてもらうことができたという。苗分与に際し、松平は花菖蒲を門外不出とし、良品が作出された場合は江戸へ送ることなどを条件とした。この門外不出の約束は後に結成された「満月会」によって現在に至るまで固く守られている。通常、満月会によって栽培された花菖蒲を「肥後花菖蒲」、会員以外が栽培したものを「肥後系花菖蒲」と呼ぶ。

肥後花菖蒲の特徴としては花弁が大きく間に隙間が少ないこと、大きく肩を張った富士山型の花型であること、花芯が大きく立っていることなどが挙げられる。花色は紅、白、藍、瑠璃、紺、紫、鼠色の7色及びこれらの絞りである。

もともとは花壇作りとしていたが、天保4年（1833）に吉田潤之助が松平左金吾か

ら譲り受けた花菖蒲の苗を鉢植えにしたところ良い結果が得られたため、以後は鉢植えが主流となった。鉢植えという特性上、屋内で観賞することが一般的である。初めは鉢に3茎ずつ植えてどの方向からも鑑賞しやすくしていたが、後に鉢に1茎または2茎植え、一方向から観賞するようになった。

○肥後朝顔（7月頃開花）

肥後朝顔の起源を知ることができるはっきりとした資料は見つかっていない。西南戦争の影響で肥後朝顔栽培も大きな打撃を受けたが、その後明治30年（1897）前後の全国的な朝顔栽培の流行に伴って再び栽培が盛んになった。熊本では明治32年（1899）に「涼花会」が設立され、門外不出として栽培が行われた。その後、第二次世界大戦や6.26水害で肥後朝顔栽培は大きな被害を受けたが、徳永据子によって守られた種子によって再興し、現在まで栽培が続いている。



肥後朝顔

花は大輪性で曜数は7曜のものが多く、花色は紅・青・紫・白などでいずれも純色鮮明であり、花筒は純白色で覆輪はない。葉は洲浜葉と呼ばれ、基部がハート形で三浅裂する。

栽培方法は小鉢本蔓作りが主流であり、鉢は口径11cm、高さ12cm程の丸形で本焼の小鉢を用いる。草丈は鉢の高さの3~4倍に留め、葉は4~5枚ほどとし、第一花を草丈の四分の一の高さに咲かせる。朝顔の特性上、観賞は午前中に限られ、第一花から第三花までを鉢植えて観賞する。

○肥後菊（11月開花）



肥後菊

肥後菊の起源は宝暦年間（1741~1760）に熊本藩第6代藩主細川重賢が藩士の精神教育と品性向上を図るために栽培を奨励したことにある。その後、秀島七右衛門が文政2年（1819）に『養菊指南車』を著し、肥後菊花壇栽培様式の基礎を確立した。明治20年（1887）には「愛寿会」が結成され、門外不出として肥後菊栽培が行われた。

明治35年（1902）には明治天皇、昭和6年（1931）には昭和天皇の行幸に際して肥後菊花壇が作られるなど肥後菊栽培は全盛を極めたが、次第に栽培家は減少し、第二次世界大戦時には愛寿会は休会することとなった。昭和39年（1964）に再結成された後は毎年見学会を催すなど再び肥後菊栽培が盛んになったものの、現在では会員が減少し肥後菊の保存と継承者の育成が課題となっている。

肥後菊の特徴は、一重咲きで平開し、花卉の形には平弁と管弁の二系統があること

である。花色は紅・白・黄の3系統があり、純白または色の濃いものが優品とされる。草丈は高・中・低があり、高さによって花壇の配置が決められている。

肥後菊栽培は花壇作りを正式なものとし、二間花壇、三間花壇、五間花壇、正面三間両袖花壇など規格が細かく決められている。花の配置にも規定があり、大輪花を後菊、中輪花を中菊、小輪花を前菊としてそれぞれ後列・中央・前列に植える。花色は右から紅・



白・黄となるように並べ、平弁と管弁を交互になるように植える。このように厳格に花壇作りの方法が決められている例は他になく、肥後菊栽培の大きな特徴である。

花壇を屋内の床の間と考え、そこに清楚な挿花以上の肥後菊の生花によって修飾するという発想を表現することが肥後菊花壇作りの真意である。近年では、鉢植えて育て花壇の配列に準じて並べ觀賞する場合もある。

○肥後山茶花（10月下旬～12月）



肥後山茶花

肥後における山茶花栽培の記録としては、宝暦6年（1756）に細川重賢が蕃滋園において薬種として栽培したというものがある。最初は薬種として栽培されていたものがやがて観賞用となったものと考えられる。肥後山茶花としての起源は山崎貞嗣が明治12年（1879）に実生選出によって「大錦」という品種を作出したことにある。山崎はその後「奈良の都」「明行空」など多くの品種を作出するなど精力的に栽培を続け、花連「晩香会」を結成した。

肥後山茶花は「晩香会」会員以外に出ることなく限られた範囲で栽培されていたが、昭和42年（1967）に「肥後さざんか協会」が結成されると一般にも開放されるようになった。

一重大輪梅芯咲であることが肥後山茶花の特徴であり、花弁数は4～10枚で、「大錦」などは花径が14cmに及ぶものもある。栽培は挿木法または接木法で行われることが多い。

(2) 近代における城内の植栽

近代の熊本城における樹木や植樹に関する事項については表 2-4-3 にまとめた。

明治4年(1871)8月、熊本に鎮西鎮台(のち熊本鎮台)が設置されると、熊本城は陸軍用地となった。江戸時代にあった竹の丸のスギ林や桜馬場の竹林、不開門坂道のスギ並木が明治10年(1877)前後の古写真では確認できないので、陸軍用地となって以降に伐採されたと考えられる。西南戦争時に古城の続邸にあった紅梅は鹿柴(逆茂木)にするために鎮台兵によって伐採されたことが記録に残っており²⁴、戦時の陣地を構築するために城内各所の樹木が伐採された可能性がある。明治12年(1879)には城内の空地にマツ・スギ・ヒノキ等の苗木1万本の植樹願いが熊本鎮台から出され、翌13年(1880)の予算に計上することが決まっている²⁵。その後、明治35年(1902)の明治天皇行幸の際に南坂を改変して造られた行幸坂には、翌年に行幸を記念してサクラ100本が植樹された²⁶。この時、行幸橋の南の通りにもサクラが植樹されたとみられ、桜町の町名がついている。

明治時代後期から大正時代には、熊本県内各地に楠の植栽を推進した河喜多義男氏による植樹が数多く行われた。河喜多氏は楠の常緑性や木材・樟脳などの幅広い用途に着目し、公用地・私有地・社寺・公園・官庁・学校・病院・住宅などの様々な箇所に植樹を行った。当時、陸軍用地であった熊本城もその一つで、河喜多氏の植樹の履歴は「楠苗献植記録」(個人蔵)として一部残されている。最も古いものは明治35年(1902)12月10日に陸軍熊本地方幼年学校(現在の監物台樹木園)にクスノキの苗100本を植樹したもので、これ以降大正7年(1918)に至るまで第六師団司令部(現在の本丸上段)、歩兵第13連隊営内(現在の二の丸広場)、輜重兵第六大隊(現在の三の丸第2駐車場一帯)、兵器支廠(現在の第一高校・桜馬場一帯)、第六師団経理部(現在の千葉城町)など旧城域一帯に及び、本数は2000本を超えている(表2-4-4)。

²⁴ 原口長之・永田日出男・中村哲也校訂『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』熊本史談会 1980年

²⁵ 「熊より城内荒蕪の地へ植樹致度伺」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C04028732100, 明治12年「大日記 近校団所軍馬囚獄 自9月1日至10月31日 第4局第8課」(防衛省防衛研究所蔵)

²⁶ 熊本日日新聞社編集局編『新・熊飽学』熊本日日新聞社 1990年

表 2-4-3 近代の熊本城における樹木や植樹に関する記述

和暦	西暦	内容	出典	備考
明治 4～10 年	1871～1877 年	竹の丸のスギ林、桜馬場の竹林、不開門坂道のスギ並木、伐採される	古写真	
明治 10 年	1877 年	古城の続邸にあったウメを鹿柴にするために伐採する	原口長之・永田日出男・中村哲也校訂『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』熊本史談会、1980 年	
明治 10 年	1877 年	天守前のイチヨウ、火災で焼失する		
明治 12 年	1879 年	城内の空地にマツ・スギ・ヒノキ等の苗木 1 万本を植樹するため、苗木代 350 円を明治 13 年度予算に計上	防衛省防衛研究所 Ref.C04028732100『歴史資料編』332 号文書	植樹位置は不明
明治 36 年	1903 年	明治 35 年の明治天皇行幸を記念し、行幸坂にサクラ 100 本を植樹	『新・熊飽学』熊本日日新聞社、1990 年	
明治後半～大正頃		河喜多義男氏によるクスノキの植樹	『熊本県近代文化功労者』1981 年「くまもと緑・景観協働機構」HP	植樹位置・本数不明
昭和 17 年	1942 年	行幸坂の美化のため、坂の両側に芝・ツツジを植える。翌年にサクラも整理か	熊本城址保存会編『熊本城』1942 年	

表 2-4-4 「楠苗献植記録」にみる熊本城内の植樹履歴

	和暦	西暦	月	日	樹種	場所	現在地	本数	備考
1	明治 35 年	1902 年	12	10	楠苗	陸軍熊本地方幼年学校	監物台樹木園	100	
2	明治 37 年	1904 年	3	22	楠苗	陸軍地方幼年学校	監物台樹木園	50	
3	明治 41 年	1908 年	3	23	楠苗	熊本陸軍兵器支廠	第一高校	202	
4	明治 41 年	1908 年	3	23	楠苗	歩兵第 13 聯隊営内	二の丸広場	103	
5	明治 41 年	1908 年	3	23	楠苗	第六師団司令部構内	本丸	105	
6	明治 42 年	1909 年	3	17	楠苗	歩兵第 23 聯隊留守隊	二の丸広場	100	
7	明治 42 年	1909 年	3	27	楠苗	輜重兵第六大隊	三の丸第 2 駐車場 一帯	120	
8	明治 42 年	1909 年	3	16	楠苗	第六師団経理部留守部(憲兵隊本部 附近)	千葉城	120	
9	明治 42 年	1909 年	4	10	楠苗	第六師団経理部留守部(経理部附近)	千葉城	730	
10	明治 43 年	1910 年	3	26	大楠苗	輜重兵第六聯隊	三の丸第 2 駐車場 一帯	103	
11	明治 43 年	1910 年	4	1	楠苗	熊本衛戍病院	国立病院	42	
12	明治 43 年	1910 年	4	1	楠苗	第六師団経理部留守部	千葉城	12	
13	明治 45 年	1911 年	3	21	楠苗	輜重兵第六大隊	三の丸第 2 駐車場 一帯	101	
14	大正 3 年	1914 年	3	16	楠苗	熊本陸軍兵器支廠	第一高校	101	
15	大正 4 年	1915 年	3	19	楠苗	歩兵第 13 聯隊	二の丸広場	15	大正 14 年に渡鹿 へ移転
16	大正 4 年	1915 年	3	23	楠苗	輜重兵第六大隊	三の丸第 2 駐車場 一帯	15	
17	大正 4 年	1915 年	3	22	楠苗	第六師団司令部	本丸	15	
18	大正 5 年	1916 年	3	25	楠苗	熊本陸軍兵器支廠	第一高校	21	
19	大正 7 年	1918 年	3	20	鬼グルミ	輜重兵第六大隊本部	三の丸第 2 駐車場 一帯	3	
計								2058	



図 2-4-4 竹の丸のクスノキ



図 2-4-5 東竹の丸のクスノキ



図 2-4-6 天守前のイチョウ



図 2-4-7 櫓方（加藤神社）のイチョウ



図 2-4-8 陸軍被服庫のクスノキ

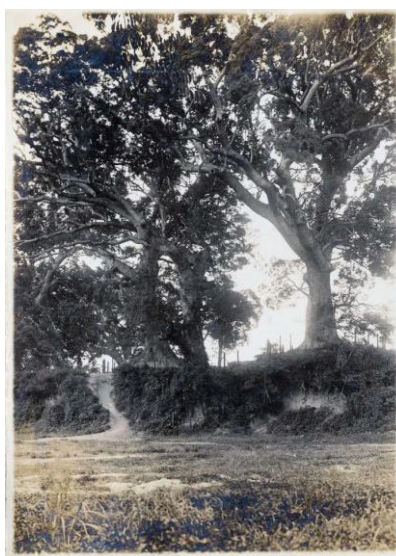


図 2-4-9 藤崎台のクスノキ群

昭和 8 年（1933）、宇土櫓ほか 13 棟の建造物が国宝に、熊本城域が史蹟に指定された。これに先立って昭和 3 年（1928）に熊本城跡保存会から提出された「熊本城史史蹟編入に関する請願書」には熊本城内の名所を示した写真が添付されている。このうち樹木については、竹の丸のクスノキ（図 2-4-4）・東竹の丸のクスノキ（図 2-4-5）、天守前のイチョウ（図 2-4-6）、櫓方（現加藤神社）のイチョウ（図 2-4-7）、陸軍被服庫（二の丸か）のクスノキ（図 2-4-8）、藤崎台のクスノキ群（図 2-4-9）が紹介されている。

昭和 17 年（1942）頃には熊本城跡保存会によって、行幸坂の美化が行われており、坂の両脇に芝やツツジ

を植え、翌年にはサクラも整備されたようである²⁷。その後、昭和 24 年（1949）に文化財保護法によって熊本城跡を史跡に、国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和 30 年（1955）に特別史跡に指定され管理団体が熊本市となる。

【資料：城内における花見の始まりと歴史】

江戸時代、二の丸等に所在した武家屋敷では、屋敷に植えられたサクラで花見を催した記録が残るが²⁸、城内には特定の花見の名所はなかったようである。なお、明治時代の初めごろの赤星閑意による「熊本城之図」（永青文庫蔵）（p.35 表 2-4-2(4)）には、現在の長堀通り沿いにサクラ並木が描かれている。



図 2-4-10 絵葉書「御幸坂桜花満開の景」（歴史文書資料室蔵）

明治 35 年（1902）の明治天皇行幸を記念して翌年にサクラが植樹されたが、これらのサクラが花見の名所として定着したのは大正時代以降とみられる。大正 6 年（1917）4 月 11 日付の九州新聞では行幸坂のサクラについて「師団司令部前から御幸橋を越え更に廿三（注：歩兵第二十三連隊）の営門前を通り抜けて、記念碑から左へ折れ、日本軌道の停留所に及んで居るのだから、道程も長く木も多い、明治三十五年の特別大演習記念に植えたのだから、樹齢大凡二十年、若木ながら種類が芳野桜だから満枝花こぼるる計り、・・・朝は朝桜、夜は夜桜場所が市の中央丈けに見物多く公会堂も花見の投足で日夜大繁昌を極めて居る」と報じている。当時の新聞記事や写真から、街の中心地に近い行幸坂は行楽地としての利便もよく、坂の両脇には出店が並び、日夜見物客で賑わった様子がうかがえる（図 2-4-10）。大正 14 年（1925）の熊本市三大事業記念国産共進会に伴って作成された観光案内では、熊本市遊覧地の一つとして熊本城とともに行幸坂のサクラが紹介されている²⁹。その後、行幸坂のサクラは昭和 2 年（1927）9 月 13 日の暴風で 23 本が倒木し、市によって 30 余本の植樹が行われた³⁰。その後も補植等を行いながら維持され、現在も城内随一の花見の名所として親しまれており、昭和初期には藤崎台の招魂社（現在の護国神社）一帯に植樹されたサクラが新たな名所となったようである³¹。

²⁷ 「熊本城内と附近の美化」『熊本城』熊本城址保存会 1942 年

²⁸ 「雑花錦語集」熊本県立図書館蔵

²⁹ 『熊本縣案内』熊本市三大事業記念国産共進会協賛会 1925 年

³⁰ 昭和 3 年 3 月 10 日「九州新聞」

³¹ 昭和 5 年 3 月 29 日「九州新聞」

(3) 現代における城内の植栽

現代の熊本城における樹木や植樹に関する事項については表 2-4-5 にまとめた。

戦後の植物の履歴については、文化財保護法第 125 条に基づいた現状変更等許可申請書や『特別史跡熊本城跡総括報告書整備事業編』等をもとに変遷をまとめた（図 2-4-11～図 2-4-14・表 2-4-5）。ここでは参考として、特別史跡における植樹だけでなく、旧城域における植樹の履歴を挙げている。対象とした時期は記録が残る昭和 27 年度から令和 3 年度までである。

戦後最も古い植樹の記録は、昭和 34 年（1959）の当時の皇太子夫妻の御成婚を記念した第一高校敷地内での植樹である。その後、城内各地に様々な樹木が植えられたが、時代によって植樹の件数には差が存在し、概ね以下のような変遷をたどっている。

昭和 20 年代から 30 年代の 20 年間は植樹の件数が少なく、わずかに 2 件の記録が残るのみである。昭和 40 年代に入ると公園整備や史跡整備に伴って植樹が行われる事例が増加する。特に二の丸地区では昭和 42 年（1967）の熊本城公園 7 ヶ年造成計画に基づいて公園整備工事が実施され、300 本を超える植樹が行われた。昭和 47 年（1972）に市議会で「森の都宣言」が決議され、昭和 49 年（1974）に刊行された『熊本城整備に関する報告書』の中では熊本城における基本的な緑化方針が示された。そこでは熊本城を森の都再建の拠点と位置づけ、「景観の基調をなしている樹木の保存や、景観にそぐわない樹種は基本的には植樹せず、既に植えられているものに関しては別の樹種に植え替えること」、「文化財としての価値を守りつつセントラルパークとしての活用を図ること」などが謳われている³²。昭和 40 年代にはこの方針に従って、城内各地で緑化植栽事業が行われており、環境整備工事に伴う植樹も昭和 40 年代に引き続き一定数みられた。昭和 60 年代以降は二の丸地区の公園整備工事が落ち着きをみせたこともあり、それまでに比べて植樹の件数は減少する。一方で三の丸地区や千葉城地区では公園整備工事が実施されており、工事に伴って植樹が行われている。その他の植樹の要因としては、復元整備工事に伴うものなどがみられた。

なお、平成 9 年度策定の熊本城復元整備計画では、“成長した樹木が本質的価値である石垣や櫓を覆い隠していることや、一部成長した樹木が石垣を破損していること”が問題点として指摘されており、復元整備計画の策定後は植樹本数が減少傾向にある。そして、近年では植樹場所についても、特別史跡熊本城跡の指定範囲内・外にかかわらず、発掘調査成果などにより、本質的価値（地下遺構、石垣等）に影響を及ぼさないことが確認された場所に限定されている。

³² 熊本城整備研究会『熊本城整備に関する報告書』1974 年 pp48～67

表 2-4-5 現代の熊本城における樹木や植樹に関する記述

熊本城における樹木や植樹に関する記述(現代)				
和暦	西暦	内容	出典	備考
昭和 29 年	1954 年	昭和 28 年 12 月に南九州財務局から城内の枯死したクス・モミなど 35 本の樹木の払い下げをうけた業者が、加藤神社のイチョウを伐採しようとし、中止命令を受ける	熊本日日新聞(昭和 29 年 3 月 10 日付)	
昭和 34 年	1959 年	御成婚記念植樹	現地記念碑より	皇太子昭仁殿下・同妃美智子殿下御成婚記念 樹種・本数不明 古城地区(第一高校内)
昭和 35 年	1960 年	公園設置のため雑木伐採・植樹	地文記第 675	坪井川へり 小さな雑木伐採 ツツジ・伊吹・黄金桧等大きくならない樹木を植樹
昭和 40 年	1965 年	行幸坂にサクラ植樹	熊日データベース	100 本
昭和 44 年	1969 年	二の丸公園造成に伴う植樹	委保第 2 の 620	ケヤキ 14 本植樹
昭和 45 年	1970 年	行幸坂にサクラ 100 本植樹	現地記念碑	電々公社、電話契約 100 万件記念 サクラ 100 本
昭和 45 年	1970 年	二の丸公園整備(S42 年度～継続)に伴う植樹(野鳥園)	委保 4-1081	野鳥園土手に茶庭造成工事を行うもの ヤマモモ 13 本・ケヤキ 10 本・センダン 13 本・ヒノキ 5 本 スギ 10 本
昭和 45 年	1970 年	二の丸公園整備(S42 年度～継続)に伴う植樹(二の丸広場)	委保 4-1081	二の丸駐車場整備工事に伴う 木柵工(オカメザサ)・タマイブキ 60 株
昭和 45 年	1970 年	二の丸公園整備(S42 年度～継続)に伴う植樹(二の丸広場)	委保 4-1081	二の丸広場整備工事に伴う クスノキ 2 本・タブノキ 10 本・シイノキ 11 本
昭和 46 年	1971 年	二の丸修景施設整備に伴う植樹	委保第 4 の 109	サクラ 217 本植樹 ヤマザクラ・ヤエザクラ・チョウチンザクラ・ソメイシノ(内訳不明)
昭和 46 年	1971 年	宮内梅園整備としてウメ植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告書整備事業編』(熊本市 2021)	ウメ 本数不明
昭和 47 年	1972 年	二の丸跡の公園整備事業	委保第 4 の 803	野鳥園 63 本植樹
昭和 47 年	1972 年	監物台樹木園土留工事	委保第 4 の 1230	ツツジ 100 本
昭和 48 年	1973 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 31	本丸 クスノキ 4 本
昭和 49 年	1974 年	植木植替	委保第 4 の 362	景観に適しないため、ヒマラヤシーダーをクスノキに植え替え 33 本
昭和 49 年	1974 年	竹の丸跡環境整備	委保第 4 の 1166	須戸口門の整備完了に伴い竹の丸の一部に瓦礫等が露出した部分が生じたが、城郭の庭園にふさわしくないため、環境の維持のために芝張・植林を行う クスノキ 3 本
昭和 49 年	1974 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 12	二の丸広場 イチョウ 1 本
昭和 50 年	1975 年	二の丸等環境整備	委保第 4-369	催し広場 クスノキ 20 本 カナメモチ 485 本 ケヤキ 24 本 クス 8 本 二の丸広場 クスノキ 12 本 ムク 8 本 イチョウ 4 本 エノキ 8 本 ケヤキ 46 本 トベラ 143 本 本丸北側一帯 クスノキ 11 本
昭和 50 年	1975 年	須戸口門前広場緑化植栽	委保第 4 の 368	クスノキ 3 本 カエデ 2 本 ヤブツバキ 6 本 ムク 1 本 茶 100 本
昭和 51 年	1976 年	県立美術館植栽	委保第 4 の 441	ケヤキ 2 本(熊本第一ライオンズクラブ寄贈)
昭和 51 年	1976 年	美術館南通用門設置	委保第 4 の 268	詳細不明 申請書に「植樹して目隠し」と記載
昭和 51 年	1976 年	緑化植栽事業	委保第 4 の 391	催し広場 ケヤキ 10 本 ムク 4 本 二の丸広場 エノキ 10 本 トベラ 46 本 野鳥園 ムク 10 本 エノキ 10 本 タラヨウ 20 本 モチノキ 20 本 ナナメノキ 10 本 ヤブツバキ 20 本 ウメモドキ 40 本 本丸 ウバメガシ 30 本 モッコウ 20 本(図面では 19 本) リンゴ 7 本 ウメ 20 本 ヒメクチナシ 40 本 ジンチョウゲ 33 本 ヤブツバキ 5 本 ヒイラギモクセイ 32 本 ヒノキ 10 本
昭和 51 年	1976 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 56	二の丸広場 ムクノキ 1 本
昭和 52 年	1977 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 40	二の丸広場 ムクノキ 20 本

※委保第〇 は、現状変更許可番号

熊本城における樹木や植樹に関する記述(現代)				
和暦	西暦	内容	出典	備考
昭和 53 年	1978 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 53	二の丸広場 エノキ 1 本
昭和 53 年	1978 年	熊本城植栽	委保第 4 の 412	竹の丸 クスノキ 4 本
昭和 53 年	1978 年	行幸坂園路の環境整備工事	委保第 4 の 44	昭和 53～54 年に実施 ヤマザクラ 14 本 ベニカナメモチ 136m
昭和 54 年	1979 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 40	二の丸広場 エノキ 1 本
昭和 54 年	1979 年	西大手門石垣復元及び排水路設置工事	委保第 4 の 663	クスノキ 5 本植樹
昭和 54 年	1979 年	熊本市と桂林市(中国)の姉妹都市 締結記念植樹	委保第 4 の 1113	二の丸広場 キンモクセイ 1 本
昭和 55 年	1980 年	環境整備	委保第 4 の 735	行幸坂排水施設工事に伴う植樹 サクラ 17 本 ベニカナメモチ 261m
昭和 55 年	1980 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 1	二の丸広場 エノキ 1 本
昭和 55 年	1980 年	公衆便所設置に伴う植樹	委保第 4 の 343	ウバメガシ
昭和 56 年	1981 年	環境保全	委保第 4 の 199	二の丸駐車場 景観保全のための植樹 モチノキ 1 本 モクセイ 2 本
昭和 56 年	1981 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 2	二の丸広場 エノキ 1 本
昭和 56 年	1981 年	熊本キャスルライオンズクラブ結成 10 周年記念植樹		
昭和 57 年	1982 年	成人式記念植樹	委保第 4 の 1162	二の丸広場 エノキ 1 本
昭和 57 年	1982 年	石垣補修に伴う植樹	委保第 4 の 734	詳細不明 千葉城地区
昭和 58 年	1983 年	「市民の森」づくりでの植樹		樹種・本数不明
平成 1 年	1988 年	園路整備に伴う植樹	委保 4-1200	シダレザクラ モッコク ドウダンツツジ サツキツツジ
平成 1 年 ～5 年	1988～ 1993 年	旧細川刑部邸移築に伴う植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	旧細川刑部邸移築時に複数樹木植樹
平成 4 年	1992 年	千葉城公園整備に伴う植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	千葉城公園整備として複数樹木植樹
平成 5 年	1993 年	高橋公園整備に伴う植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	
平成 5 年	1993 年	公園整備に伴う植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	サツキツツジ 216 本 ドウダンツツジ 288 本 クスノキ・ケヤキ・キシバノミ 290 本
平成 6 年	1994 年	三の丸史料公園北側にサクラ植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	さくらチャリティー基金植樹
平成 7 年	1995 年	三の丸史料公園南側に植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	第一勧業銀行熊本支店による植樹
平成 11 年	1999 年	駐車場整備	指令教文 11	モクセイ 3 本・ゲッケイジュ 1 本剪定 マツ・ハマヒサカキ等植樹
平成 11 年	1999 年	国体時の行幸啓記念植樹	教文 19	
平成 15 年	2003 年	樹木補植	15 委庁財第 4 の 1493	二の丸広場 イチョウ 1 本 シダレザクラ 3 本
平成 16 年	2004 年	奉行丸環境整備	16 委庁財第 4 の 853	ヤマザクラ 17 本植樹
平成 16 年	2004 年	飯田丸竣工に伴う整備工事	16 委庁財第 4 の 1695	ヤマザクラ 5 本植樹
平成 16 年	2004 年	台風被害跡地への植樹	16 委庁財第 4 の 1828	監物台樹木園 スギ 2 本
平成 16 年	2004 年	火の国ライオンズクラブ記念植樹	『特別史跡熊本城跡総括報告 書整備事業編』(熊本市 2021)	三の丸・二の丸 シダレザクラ 44 本
平成 17 年	2005 年	街路樹復旧	17 委庁財第 4 の 776	長堀 ヤナギ 2 本移植 サクラ 20 本補植
平成 18 年	2006 年	肥後つばき会設立 10 周年記念植樹	現地記念碑より	
平成 19 年	2007 年	本丸御殿復元整備	19 委庁財第 4 の 1095	ヤマザクラ 5 本
平成 19 年	2007 年	熊本城築城 400 年記念植樹	19 委庁財第 4 の 1288	シダレザクラ 1 本(福井市より寄贈)
平成 19 年	2007 年	みどりの月間開始記念植樹	18 委庁財第 4 の 2314	監物台樹木園 サクラ 3 本 ハナキササゲ キササゲ ミツマタ
平成 19 年	2007 年	第三回オイスカ熊本県支部植樹の 森記念	現地記念碑より	
平成 20 年	2008 年	さくらチャリティー記念植樹	現地記念碑より	
平成 21 年	2009 年	熊本市造園建設業協会 30 周年記 念植樹	現地記念碑より	
平成 23 年	2011 年	辛亥革命 100 周年記念植樹	現地記念碑より	旧 NHK ウメ 2 本

※委保第○ は、現状変更許可番号

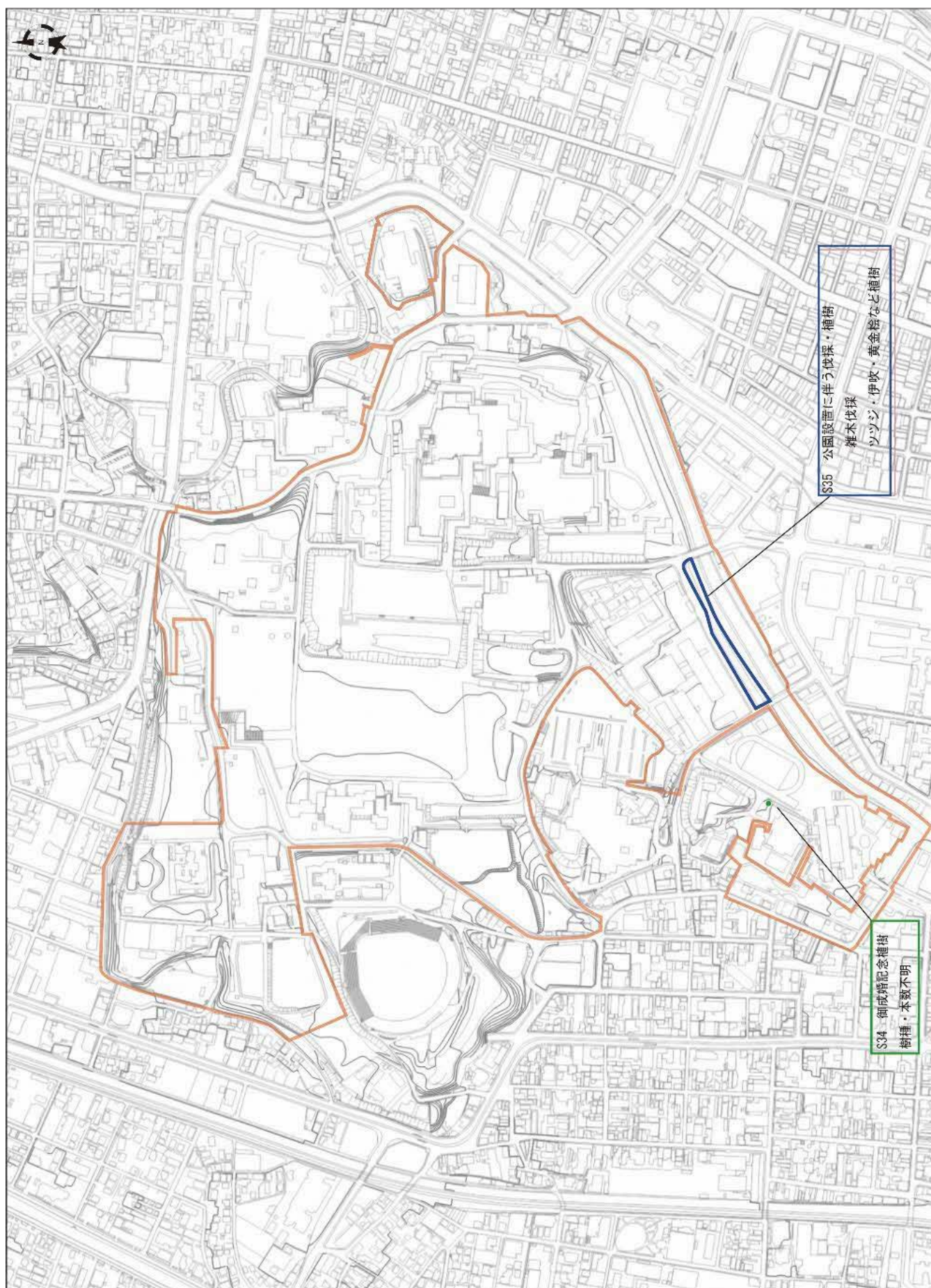


図 2-4-11 昭和 20 年代～30 年代 植樹事例一覧

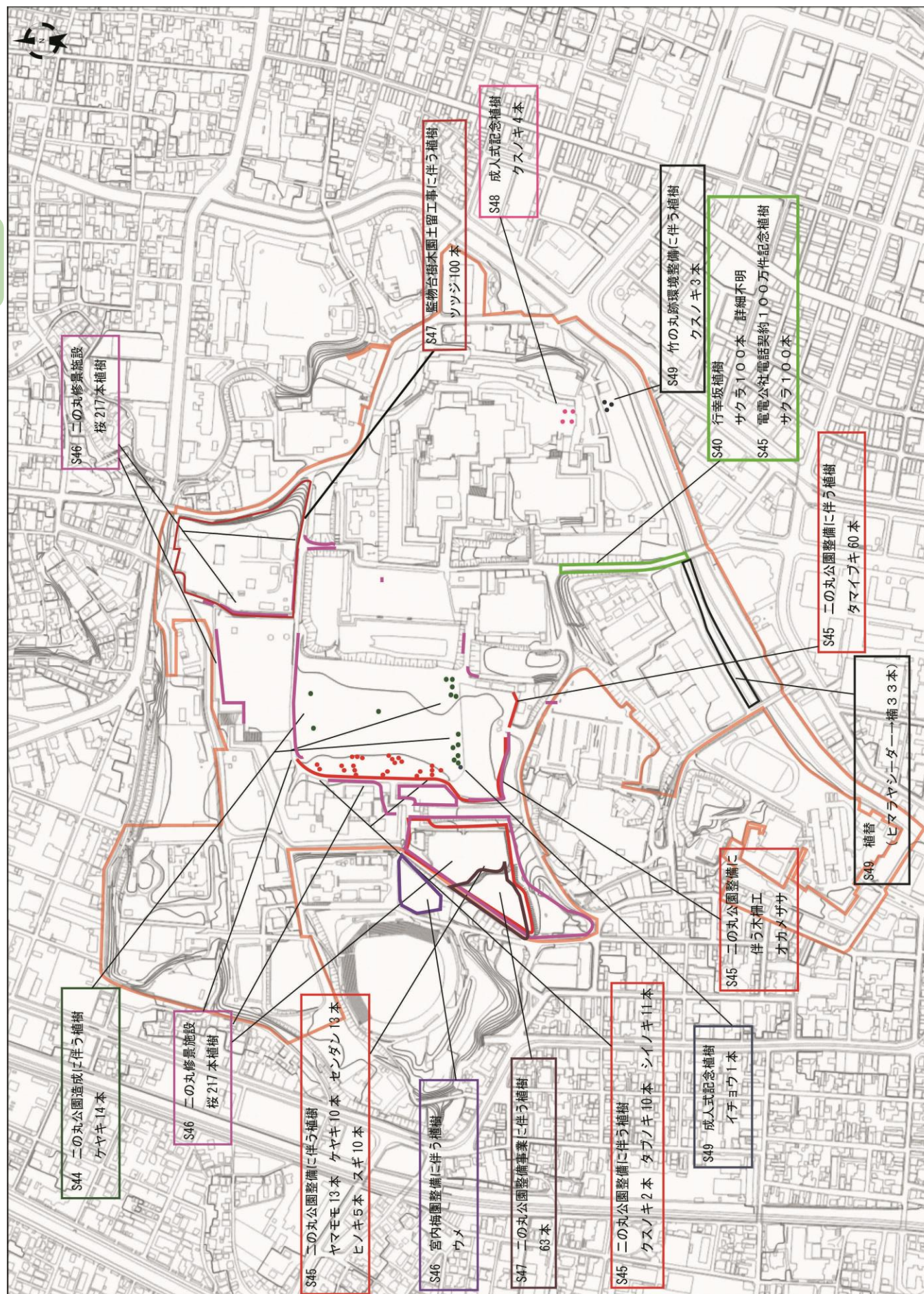


図 2-4-12 昭和 40 年代 植樹事例一覧

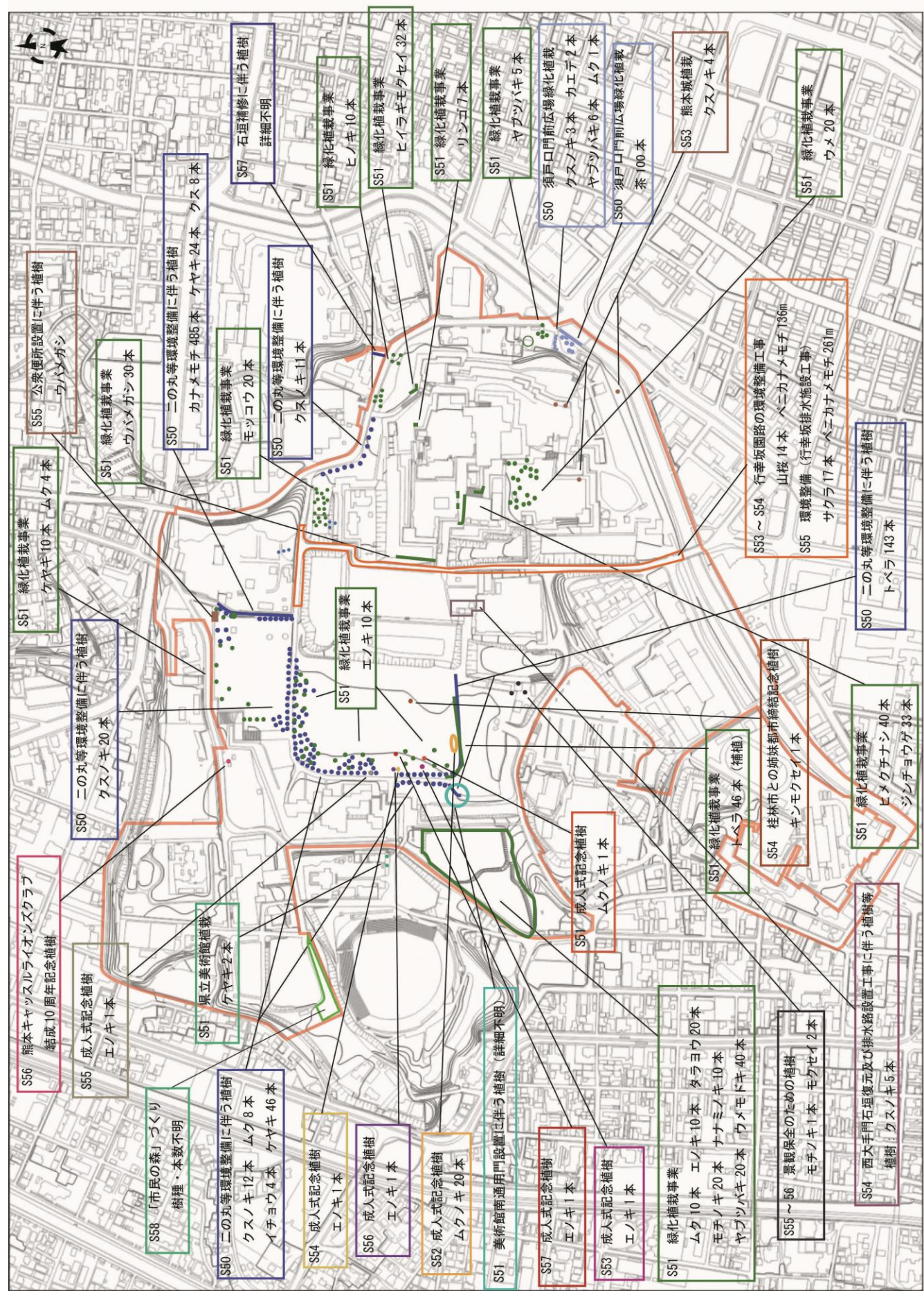


図2-4-13 昭和50年代 植樹事例一覧

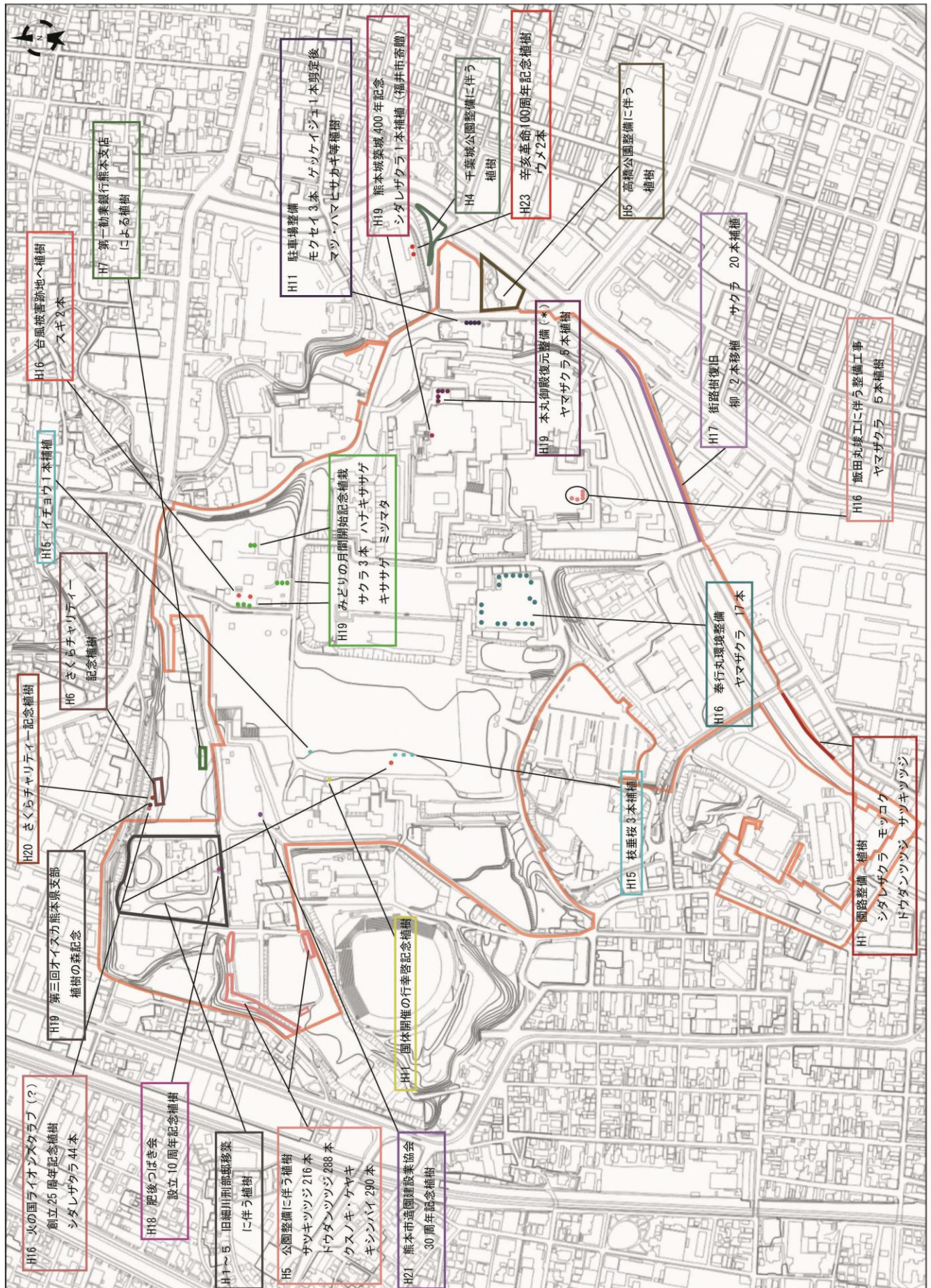


図 2-4-14 昭和 60 年代～令和 3 年度 植樹事例一覧

5. 熊本城跡の近世の景観

熊本城跡の景観は、主に石垣や重要文化財等の建造物及び樹木によって形成されており、城郭が機能していた近世期と比べると、樹木の成長により景観の変化が生じている。熊本城では幕末期の古写真は現存していないが、明治10年(1877)の西南戦争以前までの古写真は複数現存している。これらは、おおよそ江戸時代の景観を留めていると考えられるので、ここでは明治時代初期の古写真を使って現代の写真を比較し、近世の景観の特徴について述べる(写真：視点場①～⑧、A～E)。景観を比較する地点として、『特別史跡熊本城跡保存活用計画』に基づき、(1)本丸地区を外郭から重要文化財や大小天守を望む視点場8か所と、(2)本丸地区内の大天守及び宇土櫓最上階から望む視点場を採用し比較する。視点場の位置図は巻末資料p.208参照。

視点場① 通町電停付近

明治10年（1877）までの古写真が伝来していないため比較はできなかった。現在は熊本市の代表的なビュースポットの一つとなっている。

古写真 現存なし



令和3年9月撮影

視点場② 桜町交差点付近

明治4年（1871）撮影の古写真によると、飯田丸五階櫓や数寄屋丸五階櫓などの建造物の姿が確認でき、飯田丸五階櫓の奥に現在も古樹として残る飯田丸のクスノキが確認できる。現在と比較すると竹の丸のスギ林など、全体的に針葉樹が多い。



明治4年撮影（熊本市寄託）



令和3年9月撮影

視点場③ 加藤神社鳥居横

明治10年（1877）までの古写真が伝来していないため比較はできなかった。

古写真 現存なし



令和3年9月撮影

視点場④ 備前堀縁

明治4年（1871）撮影の古写真では、石垣上に数寄屋丸五階櫓・百間櫓・飯田丸五階櫓・要人櫓などの櫓が建ち並び、古樹である飯田丸のクスノキの奥に天守の姿が写る壮大な景観が撮影されている。現在は備前堀の北側・東側の岸部分に樹木が繁茂しているが、古写真では現在よりも樹木の数はいくつか少ない。



明治4年撮影（長崎大学附属図書館）



令和3年9月撮影

視点場⑤ 二の丸広場

古写真では、西出丸にある古樹のムクノキ、頬当御門付近の古樹のクスノキが確認できる。二の丸の空堀際には樹木はなく、二の丸広場にあたる部分も現代に比べて樹木は少ないが、これは明治4年（1871）の初め頃に江戸時代の武家屋敷を解体して陸軍の練兵場とするために更地としたことも一因している。江戸時代の景観を描いた絵図によると、武家屋敷には庭木などの植栽や庭園などがつくられていた。



明治4年撮影（長崎大学附属図書館）



令和4年5月撮影

視点場⑥ 竹の丸

明治10年（1877）までの古写真が現存していないため比較はできなかった。江戸時代に要人櫓などの建物があつた場所には、現在サクラが植栽されている。

古写真 現存なし



令和3年9月撮影

視点場⑦ 棒庵坂下

現在はクスノキなどの樹木が育ち、天守閣を覆い隠してしまっているが、明治7年（1874）～明治8年（1875）頃撮影の古写真では、スギやマツの高木が数本と、古樹である櫓方（現加藤神社）のイチョウがあるのみで、天守・御裏五階櫓・櫓方三階櫓などの城郭建築がよく見える。



明治7～8年頃撮影（長崎大学附属図書館）



令和3年9月撮影

視点場⑧ 千葉城橋際

同一の場所から撮影された古写真はなかったが、現在の草葉町付近から撮影したものがアングルとして近いので掲載した。これによると、天守・御裏五階櫓・本丸御殿・月見櫓などの本丸上段の建物がよく見える。長局櫓は下の石垣まで見えていることから、東竹の丸北東部には現在のようなクスノキ群はなかったことがわかる。



明治4年頃撮影（長崎大学附属図書館）



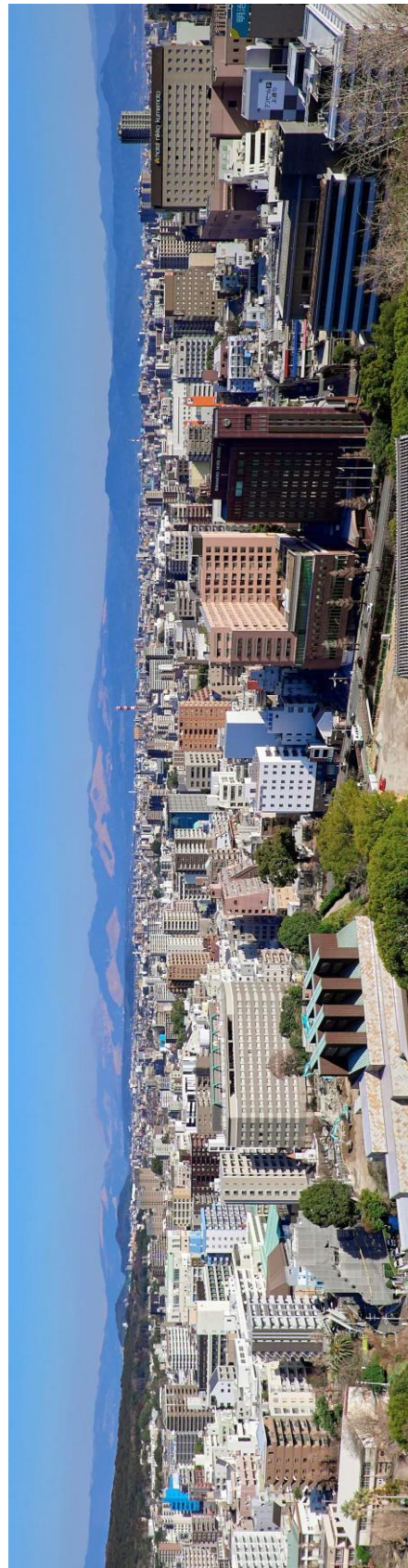
令和3年9月撮影

視点場 A 大天守最上階 東方向

明治4年（1871）頃に天守最上階から東方向を写した写真では、主に遠方側の撮影のため、手前の城内における樹木の様子は写っていないが、城域周辺部には家屋と樹木が多数点在している様子が分かる。



明治4年撮影（長崎大学附属図書館）



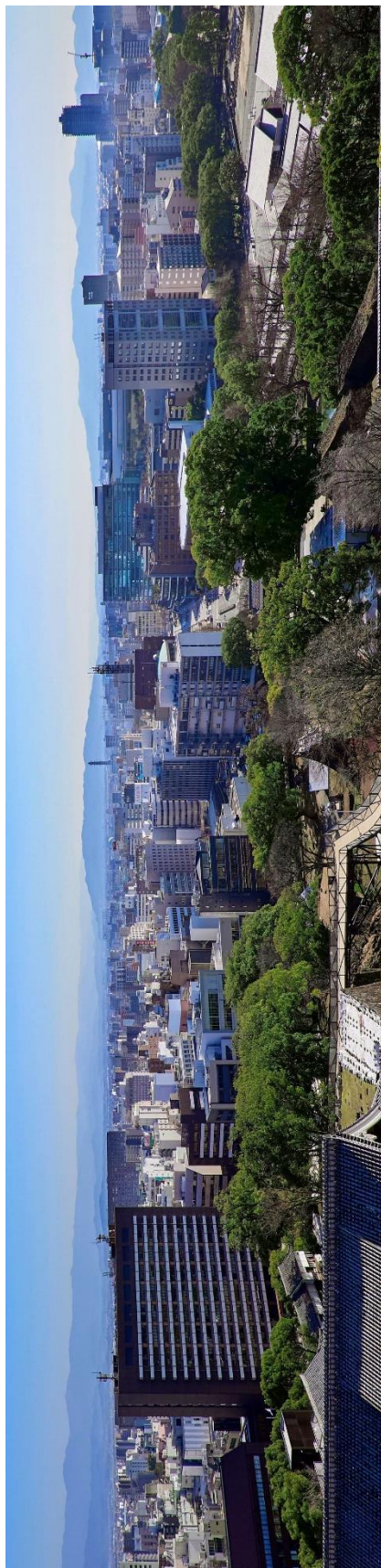
令和2年撮影

視点場B 大天守最上階 南方向

明治4年（1871）ごろに天守最上階から南方向を写した写真では、竹の丸の杉などの針葉樹が多く確認できる。現在、竹の丸はクスノキなどの広葉樹が主体となっている。



明治4年撮影（長崎大学附属図書館）



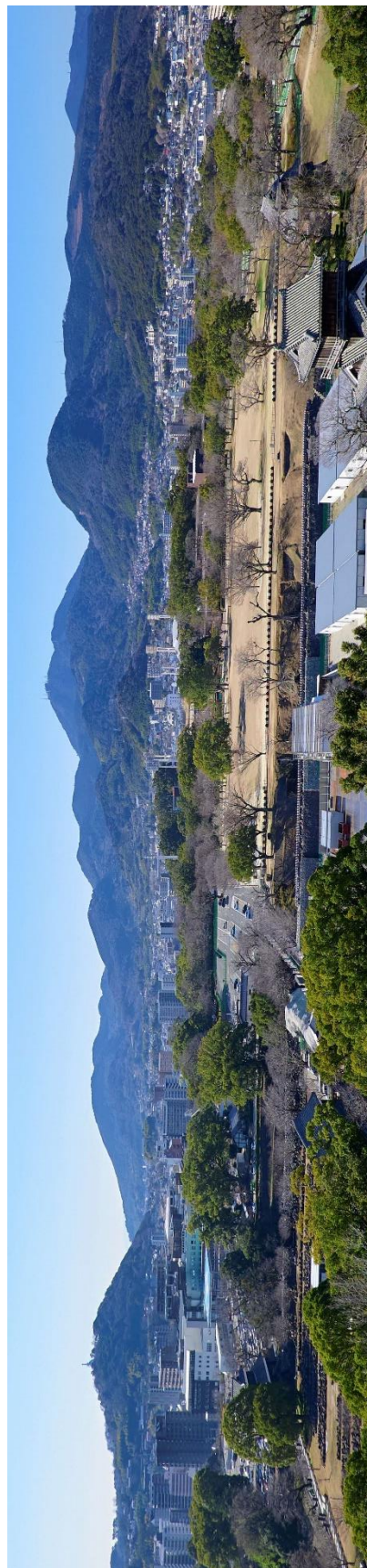
令和2年撮影

視点場C 大天守最上階 西方向

西方向を写した写真では、古樹として残るクスノキをはじめ広葉樹が多く、現在の景観と大きな変化はない。



明治4年撮影（左・中央：プリンスト大学・右：長崎大学附属図書館）



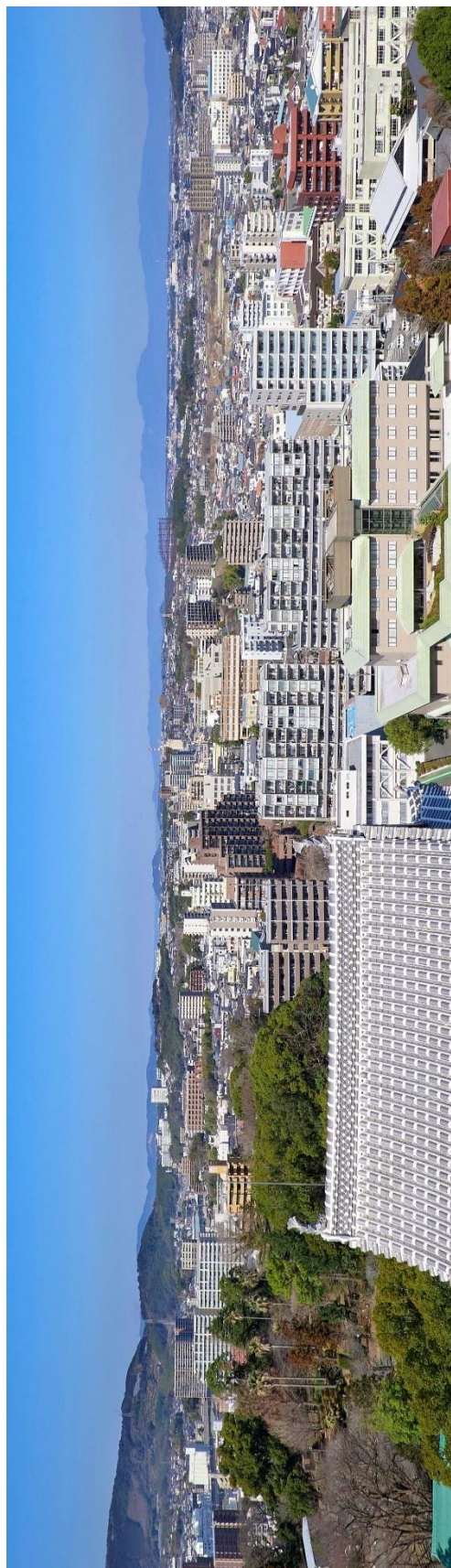
令和2年撮影

視点場D 大天守最上階 北方向

北方向を写した写真では、現在の監物台樹木園の位置に武家屋敷があり、その敷地内に多くの樹木が植栽されている様子が写っている。



明治4年撮影（長崎大学附属図書館）



令和2年撮影

視点場E 宇土櫓最上階 東方向

明治8年（1875）頃に宇土櫓最上階から大小天守を撮影した写真（E 東方向）だけが現存している。平左衛門丸には広葉樹の高木が1本あったが、それ以外に目立った樹木はなく、宇土櫓から天守を鮮明に見ることができる。その後に植栽されたクスノキが大きく育っている。



明治8年撮影（富重写真所蔵）



被災前撮影

※視点場FGH 宇土櫓最上階（南・西・北方向は現存写真なし）

6. 災害時の倒木等による毀損事例

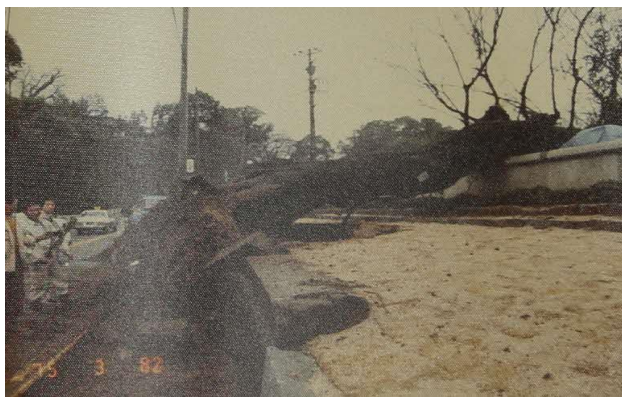
文化財保護法第33条に基づいた毀損届や文化財保護法第125条に基づいた現状変更等許可申請書等からは、災害によって被害を受けた樹木が遺構に影響を及ぼした事例を知ることができた（図2-6-1・表2-6-1）。最近では、令和3年度の大雨及び腐朽菌着生（ベッコウタケ）によって倒木が発生し、須戸口石垣の天端石が変状した事例が存在する。

毀損届・現状変更等許可申請書に添付された写真には、詳しい被害状況が読み取れるものも存在するため、その中から特に遺構への影響がわかりやすい事例を掲載する（事例1～4）。



事例1：加藤神社石垣天端石の崩落

昭和40年（1965）の台風15号によって樹木が根上がりし、加藤神社石垣の天端石を崩落させた。



事例2：伝統工芸館前石垣天端石の変状

昭和57年（1982）、強風によって街路樹が倒れ、天端石を変状させた。



事例3：倒木による法面崩落

平成3年（1991）の台風17号によって未申櫓周辺の樹木が倒れ、法面が崩落した。



事例4：倒木による東十八間櫓石垣天端石の変状

平成3年（1991）の台風19号による倒木が、東十八間櫓石垣の天端石を崩落・変状させた。

表 2-6-1 熊本城における災害時の倒木等による毀損事例

和暦	西暦	内容	出典	備考
昭和 2 年	1927 年	暴風で行幸坂のサクラ 23 本が折れ、その後植樹される	『九州新聞』昭和 3 年 3 月 10 日付	
昭和 32 年	1957 年	7.26 水害による倒木(榎)	市観第 111 号(毀損届)	7.26 水害による倒木 国立病院ほか位置不明の倒木(榎)あり(営林局関係との記載あり→樹木図か)
昭和 40 年	1965 年	台風 15 号による倒木	熊市城第 141 号(毀損届)	本丸地区 樹種不明
昭和 45 年	1970 年	台風による倒木	都公発第 147 号(毀損届)	24 本倒木 16 本伐採(カキ 1 本・榎 2 本・桜 4 本・キリ 2 本・杉 5 本 センダン 1 本・カシ 1 本 蘇生の見込みがある 8 本は植え直し 二の丸広場
昭和 51 年	1976 年	台風 17 号による毀損	熊城発第 225 号(毀損届)	天守閣前休憩所東…サクラ根元倒れ 1 本 西櫓門入口西…サクラ根元折れ 1 本 月見櫓…ウメ根元倒れ 1 本 清爽園…ヤナギ根元折れ 1 本 催し広場…アカシア根元折れ 1 本 美術館西…サクラ・キリ・アオギリ根元折れ各 1 本 その他枝折れあり
昭和 55 年	1980 年	石垣に影響を及ぼす樹木の伐採	委保 4 の 36 号	催し広場…エノキ 1 本 ムク 7 本 アオギリ 5 本 センダン 1 本 美術館南…センダン 1 本 ムク 1 本 トウカエデ 1 本 サクラ 1 本 チシャ 1 本 西出丸…センダン 1 本 飯田丸…センダン 1 本 その他本丸…クスノキ 5 本 ムク 1 本 エノキ 1 本 熊本大神宮拝殿に被害
昭和 57 年	1982 年	強風による倒木	商政第 34 号(毀損届)	千葉城地区 エノキ
昭和 57 年	1982 年	豪雨による倒木	熊城発第 97 号(毀損届)	行幸坂 エノキ倒木
平成 3 年	1991 年	台風 19 号による倒木	石垣保存修理工事・発掘調査報告書	西出丸笹園・東十八間櫓で倒木により石垣毀損
平成 3 年	1991 年	台風 17 号による倒木	平成 3 年度 台風 17 号による被害の樹木処理	二の丸他多数被害
平成 4 年	1992 年	石垣の孕みの原因となる樹木伐採	石垣保存修理工事・発掘調査報告書	エノキによる西出丸東側石垣の孕みが顕著なため、4 本伐採
平成 16 年	2004 年	台風 18 号による被害	熊本城発第 175 号(毀損届)	櫓方門周辺…倒木:サクラ 2 本 馬具櫓…幹折れ:サクラ 1 本 竹の丸広場…倒木:サクラ 1 本 二様の石垣前…倒木:サクラ 1 本 飯田丸梅園…倒木:ウメ 2 本 幹折れ:ウメ 1 本 サクラ 1 本 西櫓門入口…倒木:サクラ 1 本 田子櫓前…倒木:サクラ 2 本 東十八間櫓…倒木:サクラ 2 本 行幸坂…倒木:サクラ 3 本 樹種不明 1 本 監物台前…倒木:サクラ 1 本 二の丸広場・駐車場…倒木:樹種不明 4 本 幹裂け:樹種不明 1 本 催し広場…倒木:樹種不明 1 本 三の丸史料公園…倒木:樹種不明 3 本 三の丸広場:倒木:樹種不明 5 本 梅園(三の丸)…倒木:樹種不明 7 本 野鳥園…倒木:樹種不明 7 本 幹折れ 1 本 清爽園…倒木:センダン 1 本 サクラ 1 本 古城堀端公園周辺…倒木:サクラ 1 本 坪井川遊歩道…倒木:小竹 10 数本 合同庁舎前公園…幹折れ:スギ 1 本 桜馬場駐車場周辺…倒木:サクラ 2 本 幹折れ:スギ 1 本 イチョウ 1 本 高橋公園…倒木:樹種不明 3 本
平成 24 年	2012 年	平左衛門丸北側石垣修復及び仮設事務所設置	24 受庁財第 4 の 304	石垣のふくらみの原因と思われる樹木伐根 6 本
平成 25 年	2013 年	強風・大雨による倒木	25 九普第 23 号(毀損届)	監物台樹木園
平成 27 年	2015 年	台風による毀損	文振発 979 号(毀損届)	二の丸広場 台風による倒木 3 本 のちに伐根 国立病院 台風により倒木
平成 28 年	2016 年	※熊本地震では樹木に起因する毀損は見られなかった		
令和 3 年	2021 年	大雨による倒木	熊本城発 000222 号(毀損届)	東竹の丸 1 本

7. 現在の熊本城跡の利活用状況

熊本城内では年間を通し各種様々なイベントが開催されている。

平成 28 年（2016）4 月の熊本地震により甚大な被害を受け、地震直後は閉園を余儀なくされたが、復旧及び安全対策を実施し、順次公開を進めてきた。平成 28 年度後半からは復旧応援イベントなど暫定的な二の丸広場の活用がスタートし、また、被災後の熊本城の状況を多くの方々に見ていただけるよう、二の丸広場から天守や宇土櫓を望む見学デッキ（園路）の設置を行った。

特に被害が大きかった本丸エリアについては、復旧の様子もご覧いただけるよう段階的に特別公開を進めてきた。復旧完了までの仮設物として地上 6m の高さに設置した空中回廊式の特別見学通路（図 2-7-1）は令和 2 年（2020）6 月から公開を開始した。また、被災後 5 年をかけて復旧完了した天守閣については展示内容も刷新し、令和 3 年（2021）6 月から内部公開が再スタートしている。



図 2-7-1 復旧中の熊本城を見学できる本丸エリアの特別見学通路

そのような中、令和元年（2019）以降は、コロナウイルス蔓延防止措置のため、特別公開の延期やイベント中止の措置等を断続的に行っており、現在は、コロナ流行の状況を睨みながら、コロナ対策を取りつつ、特別公開及びイベントを実施している状況である。そのような中での令和 3 年度の特別公開エリア（有料区域の本丸エリア）の入園者数は 447,851 人であった。

現在の主要なイベントは表 2-7-1 に示す通りである。みどりに関する内容を取り上げると、春のくまもとお城まつりは、桜が開花し美しい時期の開催で、多くの来城者で賑わいを見せる（図 2-7-2）。また、秋のくまもとお城まつりでは、紅葉シーズンにあたり、天守閣前の大イチョウ（図 2-7-3）の見事な黄葉や、夜間の限定公開を行う旧細川刑部邸にてモミジ（図 2-7-4）をライトアップするなど、石垣や歴史的建造物と一体となった彩りのある景観を楽しんでいただく工夫も行っている。

また、城内（本丸エリアの竹の丸※地震以降、立入規制区域となっている）で栽培している肥後六花のうち、移動が可能な肥後花菖蒲、肥後朝顔、肥後菊については、

城内や城外の様々な施設で開花時期に合わせて展示を行い（図 2-7-5、図 2-7-6）、熊本城の魅力や文化の発信に努めている。

表 2-7-1 熊本城における主要なイベント等の年間スケジュール

	熊本城総合事務所・お城まつり運営委員会 主催行事		熊本城総合事務所 以外の行事
		みどりに関連する行事、開花状況	
4月		↑ 肥後椿の開花 ↓ ↑ サクラの開花（遅咲き種） ↓	
5月	★夜間公開	↑ 肥後芍薬の開花 ↓ ↑ ツツジ類の開花 ↓	
6月		＊肥後花菖蒲展 ↑ アジサイの開花 ↓	
7月		＊肥後朝顔展（城外）	
8月	★夜間公開	＊肥後朝顔展（城内）	火の国まつり
9月	お城まつり 名月鑑賞の夕べ	＊肥後朝顔展（城外）	
10月	流鏝馬		大にぎわい市 みずあかり
11月	秋のくまもとお城まつり ★夜間公開	旧細川刑部邸庭園限定公開 （モミジのライトアップ） ＊肥後菊展 ↑ 紅葉 ↓	
12月			↓ 肥後山茶花の開花 ↓
1月	お城まつり 迎春行事		
2月		↑ ↑ ウメの開花 ↓	熊本城マラソン
3月	春のくまもとお城まつり ★夜間公開	↑ 肥後椿の開花 ↓ ↑ サクラの開花（夜間公開でサクラのライトアップ） ↓	



図 2-7-2 行幸坂の夜桜公開



図 2-7-5 肥後花菖蒲の展示



図 2-7-3 天守閣前の大イチョウ黄葉



図 2-7-6 肥後菊の展示



図 2-7-4 旧細川刑部邸 秋の夜間公開